異世界転生でほのぼのライフ

白鳥隆士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界転生でほのぼのライフ

【Ｎコード】
Ｎ７３２７Ｌ

【作者名】
白鳥隆士

【あらすじ】
この物語は現代っぽい世界から高校生位の男子が異世界に転生し、ほのぼの暮らしてく話です。

プロローグ（前書き）

とりあえず、この作品は作者が授業で暇つぶしに書いて進めていく作品です。
そのため、文章がｇｄｇｄだったり、わけのわからん展開になったりしてしまうかもしれません。
皆様のちょっとした暇つぶしとなれる作品を目指しますのでどうぞよろしくお願いします。

プロローグ

何か死んだ。

さくっと死んだ。

あっけなく、今までの人生にいきなり、唐突に終止符がうたれた。

ほんと人の命って簡単に消え去ってしまうんだなぁ。と、何故か人ごとのように感じていた。

まぁ、特にやりたいことも、やりこんでたりすることもない。

ただただ毎日同じようなことを繰り返すのみ。

朝起きて、両親に挨拶し、飯を食べ、学校に向かう。

友達とたわいもない会話をし、授業をぼ〜っと受ける。

学校から帰り、パソコンを弄ったりゲームしたり雑誌を読んだりし、

風呂に入り、夕食を食べまた部屋で色々して、

日付が変わるころにベッドに入る。

そして、それが何度も、何度も繰り返される。

こんな風に毎日を感じていたから、自分の死も何の感慨もなく思えるんだろう。

しかし・・・、ここまでだらだらと自分のことを振り返ってみたりしたが・・・ここどこ？

周りは真っ暗闇。でも、なんか温かい。そして、水っぽい。ここが、俗に言う『あの世』ってとこなのかな？

でも、動かせないけど手や足の感覚がある。

ふぁ～・・・。もう何でもいいや。どうせ死んでしまってるんだから。今はこの眠気に身を委ねよう。

願わくば、来世はもっと刺激のある毎日を送れますように・・・。

第1話：転生に神ってテンプレにも程がある（前書き）

第1話です。皆様の暇つぶしとなればうれしいです！

第1話：転生に神ってテンプレにも程がある

さて、前回のプロローグで散々語っていた俺なのだが・・・

何でかわからんが俗に言う転生というものを体験してしまったらしい。

ことが発覚したのは今から1年ほど前、俺というかこの体が3歳位になった時だ。

あの頃はまだ昔のこともほとんど覚えておらず、なんか無駄に知能が発達している何の変哲もない赤ん坊であったころの話だ。

俺が昼寝をしようとしていた時、なんか、いきなり自分のいたはずのベッドではなく、訳のわからん真っ白な空間に俺は昔の姿で立っていた。

それと同時に昔の記憶もよみがえる。あの時の頭痛はマジで痛かった・・・。

おっと、少し話がずれたな。

で、落ち着いて考えた結果ここはテンプレというか、まぁ神とやらがいる場所なんだろうな～という結論に至った。

ぶっちゃけこの結論に至った時点で落ち着いていないのだが。

多分、あっちの中で俺の存在はイレギュラーというか予想外な存在なんだろう。あのまま育っていったら多分『俺』という存在が生まれたりするだろうからな。死んだはずの人間が復活は色々まずいと

思うんだ。俺は。

そう考えると、また俺は死ぬことになるのかね。まぁ、何の感慨もないからどうでもいいけど。生んでくれたあの人たちには悪いけど息子の俺はもう死にます。悲しまないでね？

「いえ、あなたは死にませんよ？」

いやいや、だって俺の存在邪魔だと思いません？

「そこまで言わなくてもいいと思いますが・・・」

そんなこと言っても、俺がイレギュラーであることに変わりないし。

「でも、あなたの世界でもいましたよね？前世の記憶を持った人って」

いや、ああいうのってなんか作り話っぽい・・・ってあれ？

「どうかしましたか？」

アンタ誰？

「今まで気づかずに話していたんですか！？」

いや、喋ってないじゃん。

「お互いの考えが伝えられれば会話として成立すると思いますよ？」

そういうもんかね。

「そういうものです」

そうかい。で？あんた誰？

「一番初めの方で結論を出していたでしょう？まぁいいです。私は●△♪卍＞◆・・・っと。この言語では伝わりませんね。そうです

ね・・・便宜上、私のことは神、とでも呼んでください」
了解。で、神さんのアンタは俺をここに連れてきてどうすんの？

「ただ、謝っておこうと思いまして」
謝る？なんで？

「わたしたちの不手際で何の知らせも情報も得ることなくこの世界に放り込んでしまいましたから」
いや、俺が悪かったんじゃないの？

「いえ、あなたが死んだときにちょうど同時にあなたたちの言う『並行世界（パラレルワールド）』でテロ、戦争などが起きてたんです。それも複数の世界で。その時送られてきた死者の魂は、いつもよりも多く、さばききることができなかったんです。その過程であなたの魂だけ紛れてこの世界に流れ着いてしまいました。だからこそ、私たちの不手際なんです」
ふ～ん、そんな背景があったのか。俺の転生には。

「ええ。本当に申し訳ありません。いくら謝罪をしても償いきれないほどの大罪です」
いや！そんな頭下げなくていいから！たかが俺なんかに。ほら頭上げて！俺は少しも怒ってないから。

「ぼんどうでずが・・・？」
ほんとほんと！だからほら！鼻チーンてして。

「は、はい・・・」
で、深呼吸。吸って～、

「すぅ～」

吸って～
「すぅ～」
吸って～
「・・すぅ～」
吸って～
「・・・・すぅ、って！いつになったら吐くんですか！」
ん～特に決めてなかった。
「決めてないって・・・」
どう？すこしは落ち着いた？
「は、はい・・・少々不本意な感じですが」
ん、僥倖僥倖。で、これから俺どうすればいい？
「あ、そうですね。一応最高権限を持っている神・・・まぁ、平たく言えば上司なんですが、罪の代わりに何か欲しいものがあったらかなえてくれるそうですよ？」
そうなの？ん～・・・つっても、正直欲しいものとかないんだが・・・。
「えっ！？あれですよ？あの転生といったらチート化とかがなんか流行ってたりするんじゃないんですか？」
いや、流行ってるとかは知らんが・・・別に今この歳でこれだけの思考能力があったら充分だろ。それに、
「それに？」
最初から最強レベルコンティニューは面白みがないだろ？こういう

のはレベルをあげることに意義があるんだよ。

「そういうものなんです？」

少なくとも俺はそう考えてるけど？

「うぅ・・・でも、何かしないと私が怒られちゃうんです・・・」

む・・・それは、なんか悪い気がするな・・・。

よし、なら俺の今いる世界ってどんな世界？魔法ある？

「そんなので良いんですか？」

この世界のこと何もわからないからな。赤ん坊だから調べることもできんしさ。

「それもそうですけど・・・」

ほら、ならハリハリー！

「・・・わかりました。ではお答えしましょう。今あなたがいる世界は根本からあなたのいた世界とは違う世界です。それは『魔法』と『魔術』、『気』などの力が存在し、更にドラゴンやその他空想上の生き物とされる幻想種や魔物と呼ばれる存在もいます。まぁ所謂ファンタジー系というやつです」

・・・・・・・・・

「どうかなさいました？」

っしゃーーーー！！！

「うわっ！！」

よしよしよし！魔法に魔術、気か・・・！いいね！いかにもファンタジーって感じで！

「そ、そうですか・・・それは良かったです」
うん！ありがとうな、神さん。

「え？これだけで良いんですか？」
いや、ぶっちゃけこれ以上知ったら生きてくのに面白みなくなるし。
魔法の存在があるってわかっただけでも大収穫だよ！

「でも・・・」
俺が満足したんだからいいの！

「しかし・・・」
あーもう！！俺がいいっていってんだから素直に受け取れ！

「・・・わかりました。そうさせていただきますね」
うむ！始めからそうしときゃよかったんだよ。

「・・・はぁ」
どしたん？

「いえ、なんでもありません」
そう？

「ええ。本当にすみませんでした」
だからもういいって。

「そうでしたね。それではこれからの一生、悔いの残らないように過ごしてくださいね？」
おう！

「では、いってらっしゃい」
・・・いってきます！

神side
あの子は行った。しかし・・・、

「強引に流されたけどあれじゃあやっぱり怒られるし才能だけでもこっそり与えておこっと」

side end

てなことがあって現在に至る。あれから俺はできる範囲での魔法の訓練をしてきたりした。座禅（みたいなもの）をして、自分のうちにあるであろう魔力を見つけたり、それを体の隅々まで行き渡らせてみたり、魔力を小さなピンポン玉位の塊にして、部屋の中で縦横無尽にコントロールしまくったり・・・。これらのことを気でも試してみたり・・・。

ぶっちゃけ二次創作とかで見知った訓練方法だ。おかげで魔力のコントロールに関しては自信がついてきた気がする。

で、これらをしていて思ったのが、俺には気を扱う才能が壊滅的にない。本当に酷い。試すだけで諦めたし。

ということで俺は後衛のポジションで生きていこうと思う。まぁ、元々格闘技とか剣道とかやってたわけじゃないからあんまし武器は

使えんと思うからいいけどね。

それに、味方を魔法で援護するってのもカッコ良さそうだし。

まぁ、この一年こんなことをやりつつ、考えつつ生きてきたわけです。

そして、今日。俺はなんか幼稚園？的場所に行くようになるらしい。

よし、前世では成し遂げられなかった友達１００人、達成して見せる！！

第２話：自分の（精神）年齢考えてなかった・・・ｏｒｚ（前書き）

今回はひじょーに短い。申し訳ないです。

第2話：自分の（精神）年齢考えてなかった・・・orz

友達１００人目標に幼稚園的施設に入って3日。

この3日間行動し、思ったことは、

みなさんと精神レベルがあってない・・・orz

前世では高校生であった俺としては一緒に遊んでも近所のちびっこ達と遊んでいるような感覚になってしまう。

正直、職員の人達の方がよっぽど話がはずむ。一番初めに友人と思った相手が園長だったのはいい思い出だ。

さて、そんなわけで今日も一日元気に過ごし、みなさんは帰る時間。俺は、お勤めの終わっている教職員と園長のじーさんと共にお茶会をしていた。

前世から甘党（和菓子とかの時は抹茶とかも飲める）の俺はコーヒー牛乳、他のみなさんはコーヒーを飲みながら談笑していた。

そんな中で、何でかは知らんがそれぞれ受け持っているクラスの現在の状況を話し始めた。

多くのクラスでは概ねトラブルなどは起こってはいないらしいが、一つのクラスだけ懸念事項があるらしい。

その内容とは、一人の少女がみんなの輪の中に入れてないというか入ろうとしておらず、一人隅っこで絵本を黙々と読んでいるらしい。無口でよく言えば感情表現が下手な子、率直に言えば無表情らしい。常に。

今はまだ特に問題らしい問題は起きてないが、このままだといじめに発展する可能性もある。

それを聞いた教職員の方々はう～む、と一斉に悩みだした。そんな状況をクッキーをほおばりながら俺は見ていた。

そして、5分位たっただろうか。今度は全員がアイコンタクトをとり、頷いた後、一斉にこっちを向く。

いきなりだったのでちょっとびっくりしつつも、

「どーした？みなさん」

と聞いてみる。

「うむ。今の会議で決まったのじゃが、君にこの問題の解決を頼む」

さっきのアイコンタクトが会議なのだろうか。だとしたらお粗末じゃないか？

「ちなみに票数は？」

「満場一致じゃ」

あんたら仕事する気あんの？

「まぁ、こういう問題は生徒同士で解決するのが一番じゃろう？」

「・・・はぁ、しゃーない。やってみますよ」
いじめを受けそうながわかってて見て見ぬふりをするのは嫌だしね。
「そうか、よろしく頼むの」
「まぁ、俺の全力を尽くしますよ」
そう言ってちょうど迎えに来ていた両親に手をあげて呼びながら教室から出て行った。

第3話：そんな子供・・・修正してやるっ！（前書き）

3話目です。今回後書きで簡単なアンケートをとろうと思いますのでお願いします。

第3話：そんな子供・・・修正してやるっ！

さて、今日から件の少女とコンタクトをとるため、少女のいるクラスへと向かったのだが・・・

「おい、いつまで黙ってんだよ！」

「すこしは喋ったらどうなんだ！」

「無視すんな！」

いじめが発生してる・・・ｏｒｚ

昨日の会議がフラグだったのか！？そうなのか！？

てか、何処の世界にもいじめっ子とその取り巻きっているもんなんだなぁ～、としみじみ思う。

そして、件の少女は遠目にはわからんが、彼らに顔を向けている。

他のクラスの子供たちは・・・まぁ、自分よりもがたいのいい奴に突っ込めるほど勇気とかはないらしい。全員が周りで遠目にびくびくおびえながら様子を見ている。

周りの状況把握をしていると、なんかしびれを切らしたいじめっ子が手を振り上げていた・・・ってやば！！

少女ｓｉｄｅ

なんで怒られなきゃいけないの？みんなの邪魔にならないように隅

っこで絵本を読んでいただけなのに。
どうしてこんなことをするの？
そんなことを思っていると大きな男の子が腕を振り上げる。あぁ・・・・殴られるんだ。
そう思った私は少しでも痛みが和らげばいいなと思いながらギュッと目を閉じて・・・あれ？痛みが来ない。
おそるおそる目を開けると、そこには、藍色の長い髪を持った小さい男の子がいた。
ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

とっさに飛び出して手を受け止めるまでは良かったんだが・・・。
ううむ・・・こっからどうしよっか。俺以外の奴らは呆けているみたいだし、・・・。
うん、当初の目的である少女とのコンタクトでもしようかな。
そう思って後ろに振り返って少女と同じ目線になるようにしゃがみ込む・・・つっても、この子と俺とではほとんど背が変わらんのでしゃがむだけで一緒の目線になるんだが・・・。
まぁ、そんなどうでもいいことは置いといて。

「おっす、俺はショーゴ」
とりあえず片手をあげて自己紹介。
「・・・？」
しかし、少女は首をかしげる。まぁいきなり言ったし訳分からんか。
「君の名前は？」
「・・・セリア」
「ふむ、いい名だね。じゃあ、これからはセリアって呼ぶぞ？」
こくりとセリアは頷く。
「じゃあ、セリアも俺のことショーゴって呼んでくれ」
また同じようにこくりと頷く。
「なら言ってみよー！さあどうぞ！」
「・・・」
「・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・ショーゴ」

「はいよくできました！」
そう言ってセリアの頭をクシャクシャっと撫でる。さらさらしていて気持ちがいい。

セリアは俺が腕を伸ばしたとき一瞬びっくりしていたが、撫でられているのがわかるとびっくりした顔になって、現在進行形ではにかんだような表情を浮かべている。

あ～、可愛いなぁ！

そんなセリアに癒されまくっていた俺なのだが・・・、

「おい！お前なんなんだよ！」
ちっ！このｋｙが。このままどっか行けばよかったのに！

あれ？でもこいつらセリアのことをいじめてたんだよな・・・。そーかそーか・・・。

ゆらりと俺は立ち上がり、

「おい、さっさと表でろ。貴様らみたいに寄ってたかってこんないたいけな少女をいじめる輩は俺が修正してくれるわ！」
そう、アホ３人組に人差し指を向けて言う。

「なんだと！」

「てめー、調子にのるなよ！」

「そーだそーだ！」
なんかわめき散らしているが知ったこっちゃない。すべてをスルー。
後ろからうるさい奴らが来るのを感じながらどういう教育的指導をしてやろうかと考えながら、俺は外へと向かった。

第3話：そんな子供・・・修正してやるっ！（後書き）

アンケートというのは1話の長さをどのくらいにするか、といったものです。

1，1000～1500字

2，3000字前後

3，3000字以上

この3つの中からお願いします。それではまた次回もよろしくお願いします。

閑話：設定と言えるかどうか微妙なもの（前書き）

一応、現段階で考えている設定です。後で書き加えたりします。
魔族と神族のとこ改訂しました。
魔獣のところを改定しました。

閑話：設定と言えるかどうか微妙なもの

世界観

様々な種族が共存しており、特に大きな戦争なども起きていない平和な世界。詳しい設定に関しては本編に書く。きっと。

種族

人間：もっとも数の多い種族。魔法とかが使える以外は現実世界のとそう変わりはない。一番凡庸な種族。

魔族：外観は大体普通の人間と変わらず。ただ、魔力量、気の量、身体能力、寿命など基本スペックから人間とは違う。ただ、使える属性が闇、土、雷、氷に限定される。隠している人が多いが、悪魔のような羽と角が生えている。↑改訂・・・悪魔のような角とか羽は成人してから。成人する年は人によってまちまち。隠したい人は隠すし、隠さない人は隠さない。

神族：魔族とほとんど同じ。ただ、使える属性が光、火、水、風に限定される。魔族同様隠している人がほとんどだが、天使のような羽と輪っかがある。↑改訂・・・上の魔族と同じように成人するまでは現れないし、隠すか隠さないかは個人によりまちまち。

獣人：獣に人の特徴が現れた者たち。外観はピンからキリまで。獣に限りなく近いものも居れば、人に限りなく近いものもいる。身体能力と気の扱いなら上の種族たちと比べてトップ。ただ、魔法の才は皆無。

魔獣：何らかの原因で突然変異した動物、もしくは長い年月を過ごした魔物（この後に書く）に人のような知性が身についた者たちの総称。魔法、気の両方が使える。他の種族とはほぼ会うことがない。魔獣の子は純血のみだが幼いままでも魔獣のような知性を持つ。

魔物：本能に従って生きる者たちの総称。強さはピンからキリまで。魔法や気などは使えない。

魔法、魔術に関して。

魔法とは、自分が加護を受けている精霊の力の一部を利用し発現するもの。精霊の力を利用するので威力、自由度が高い。ただ、魔力の消費量も高い。

例；普通に持っている魔力を１００とすれば、中級魔法で１００程。国に仕えている最高ランクの魔法使いでも上級魔法（３００位）３発が限界。

加護を受けている精霊の判別法は色々ある。一般的には教会で１０歳になれば調べてもらえる。一部、破格の才能をもつものは夢などによって知ることもある。

魔術とは人が開発した誰にでも使えるもの。魔力の消費量は低いが魔法ほど利便性が高くない。

なぜなら、使うためには陣と呼ばれるものを描かねばならず、さらに周りの環境、使用者の精神状態によって威力が変動してしまうた

めである。

精霊について

精霊とはこの世界を構成する者たちで、上級属性に光、闇。光の支配下に火、風、水の下級属性。闇の支配下に土、氷、雷の下級属性が存在する。
特殊な精霊として、時空、元素を操る精霊も存在する。

そのすべての頂点に精霊王が存在する。

閑話：設定と言えるかどうか微妙なもの（後書き）

とりあえず、こんなもの？他に聞きたいことがあればメッセージなり感想にどうぞ

第４話：戦いとは一瞬でけりがつくもの・・・なのか？（前書き）

話を書いてる手帳を学校に忘れてて、土日は更新なしでした。
後、授業の合間に書いてるので１話せいぜい２０００字前後が限界
でした・・・ｏｒｚ

第４話：戦いとは一瞬でけりがつくもの・・・なのか？

「さて、準備はいいか？」
屈伸やら伸脚などの準備運動をしながらアホ三人組言う。

「それはこっちのセリフだ！」

「やっちまおーぜ！」

「後で謝ったってしらねーからな！」
なんというか・・・アホだ。この一言に尽きる。

とりあえず作戦確認。あのアホ３人組はとりあえず、がたいがいい。小柄な俺と比べたら。ついでに言うと肉体に関してはほとんど鍛えてないからパンチの威力１発をとっても威力はダンチだろう。

なら俺に出来ることは一つ。

相手に気付かれない程の速さで決める。これだけだ。

幸い、この世界は魔法という便利なものがある。

これを使って一撃で決める。というか一撃くらいしか持たない、俺の体が。

ま、とりあえず気合い入れていこーかね。

「じゃあ、アホども。行くぞ？」
相手に聞こえる程の大きさで言った瞬間、俺は地面を蹴る。
ドゴーン！！
一瞬で相手の目の前まで到着。
小柄でなお且つ一瞬でここまで移動したので全然ばれてない。
アホどもが俺がいないことに気付いたと同時に今度は左へとステップ、片足で着地した後背後へ跳ぶ。
アホどもが周りを見始めたがすでに時遅し。手刀で三人の首を軽く叩く。それによってアホどもは崩れ去った。
そして、ついでに俺の体も限界らしく一緒にバタンキュー・・・
ん・・・、なんか柔らかくて温かいなぁ・・・。あれ？俺何してたっけ・・・？
セリアがいじめられてて、それに介入して、友達になって、アホどもを成敗して・・・。

あぁ、気絶か・・・。まぁ４歳児にしては頑張ったよ、うん。あんな無茶したからしばらく運動もできそうにないが・・・。

さて、さっきのやったことの種明かしだが、答えは簡単。魔力で自分の体を強化した。

漫画とかでよくあるから再現できるかなぁ、ってふと思いついたからやってみた。

思った以上に反動があるけどさ。後衛志望だからって体はきちんと鍛えろってことみたいだ。始めの爆音？は地面を思いっきり蹴ったら陥没したんだよ・・・。正直やりすぎた・・・。

で、首の何処に手刀を当てればいいかなんて知らないから適当に手から魔力を放出させてぶつけたら気絶したってわけさ。

どれも即興で思いついたことだから怖かったが、成功してよかった・・・。

とまぁ、こんな感じで。そろそろ起きてセリアの顔でも見に行こうかな。

で、目を開けると目の前には紫がかった銀色の髪・・・あれ？なんか体が重い・・・？

「すぅすぅ・・・」

なぁ～んだ、セリアが寝てただけ・・・って、

「起きろ！セリア！」

「・・・うみゅ」
あぁ、可愛い・・・じゃなくって！
「なんでお前俺の上で寝てんだ？」
ついでに言うと、現在は保健室みたいなとこのベッドで寝かされているみたい。
「ショーゴ、起きなかった。見てたら眠くなった。ショーゴ温かいから一緒に寝た・・・ダメだった？」
くそぉ・・・こてん、と小首をかしげながら言うとは・・・
「いや・・・うん、俺も温かかったからいいよ・・・」
あんな仕種で聞かれたら許すしかないじゃないか・・・！
「おぉ、起きたか？ショーゴ」
「おお、じーさん」
「体の調子はどうじゃ？」
ふむ・・・
「やっぱり、筋肉痛が酷いというか・・・。あの動きはさすがにこの体が耐えれたものじゃなかったな」
腕もそこまで上がらんし、足なんて動く気がしない。
「そうか・・・、ところでお主自分の精霊の加護のことがわかっておるのか？」
「なんだそれ？」

「・・・お主、さっきは何をイメージしてやったのじゃ？」
「いや、足に魔力を込めて放出を三回と手からの放出を三回」
「・・・」
あれ？なんかおかしいこと言ったか？
「ふむ・・・。まぁよい、お主はもう少しそこで休んでおれ」
そう言ってじーさんは足早に部屋から出ていく。なんかあるのか？
くいくいっ
「ん？どした？」
「・・・なんでもない」
む～、やっぱりまだ遠慮があるというか・・・。
「ほら、友人の俺に言いたいことがあるならいいな。口に出さなきゃ伝わらんぞ？」
「・・・ずっと一緒にいてくれる？」
・・・はい？
「わるい・・・もっかい頼む」
「・・・？ずっと一緒にいてくれる？」
どうやら俺の聞き間違いではないようだ。
「それはどういう意味で？ずっと友達でいるってことか？」

こくりと頷くセリア。

「それならもちろんＯＫだ。今日のように危ない目にあってたりしてたら助けてやる」

「ほんと・・・？」

「ああ、ほんとだ」

そう言うと、セリアはギュッと抱きついてくる。

「ずっと・・・一緒・・・」

そう言ってまた寝始める。ってどんだけ寝るんだよ・・・。まぁいっか。とりあえず俺も・・・寝よう。

第5話：周りの人たち（前書き）

今回は短い・・・申し訳ないです。

第5話：周りの人たち

ｓｉｄｅ　園長

ショーゴから話を聞いた後に彼の両親も呼び、会議を開くことにした。

「今回集まってもらったのはショーゴが魔法を使っておったことについてじゃ」

ワシの言葉を聞き、ざわつき始める。無理もない、魔法とはあんな歳で扱えるものではないのじゃから。

「し、しかし今まであの子はそんなそぶりを見せたことがないですよ！？」

ふむ・・・親であるこの人達にすら気づかれんように使うとは・・・まさかあれが初めて使用したとか言わんじゃろうな、多分・・・。

しかし、それよりも気になることがある。

「更にじゃ。彼は自らの属性に関してまったく知っておらぬ。本人にも自覚はなしじゃ。風属性の魔法だというのにただの魔力を放出しただけじゃといっておったしの」

ただの放出程度であの程度の出力が出たら全員が使っておるわ。

しかし・・・自分の加護を受けている精霊の属性をしっかりと理解せねば魔法は使用できぬ。これは古から決まっておることじゃ。だというのに奴はそれを無視するように魔法を使用した。これをどうとらえるべきか・・・。

「・・・今からでも学院（アカデミー）に異例入学させるかの？」
と独り言のように呟くように言ったのじゃが、

「いやいや、使えるだけでは駄目ですな。４歳児程度の精神力に身体能力、思考能力では・・・」

「お前はあんましあの子と関わってなかったみたいだな。あの子は４歳児とは思えないほど大人びてもいるよ」

「だよなー。あいつが遊んでんの見てても同年代同士で遊んでると言うよりもあいつが１歩引いて保護者みたいな感じで混じってるし」収集がつきそうにないの・・・。

「落ち着きなされ、皆さん。最後に決断を下すのはあの子の両親であるこの方たちじゃ」
ワシの言葉で全員が彼らの方へ向く。

彼らも自分たちの子供の扱いに関して話し合っておるようじゃった。それもすぐに済み、ワシらが視線を送ってるのを理解すると、お互いを見て頷く。

「わたしたちはあの子を・・・ショーゴをここに通わせてあげるべきだと考えました」

「魔法が使えようともあの子にはまだ４歳。周りと合わすようなことはできないでしょうし、それでは学院（アカデミー）の人達にも迷惑がかかります。どれだけ大人びているように見えても私たちはショーゴに年相応の暮らしをさせてあげたいと思います」
あの子の両親の言葉に皆の者が沈黙する。

「そうか。ならば我々は何も言いませぬ。ただし、彼にはきちんと魔法のことをしっかりと教えておいてくれ。万が一の間違いがあってはいかんからの」
まぁ、あの子なら問題ないとは思うがの。

『はい』

「ではショーゴに関しては今までと変わらず。よいな？」
ワシの言葉にこの場にいる全員が頷く。

「それではこれにて解散とする。今この場に居らぬ者にも同じように伝えておいてくれの」

第６話：夢の中にて（前書き）

話がまとまらなかった・・・。つーかまとまってない気がする。

第6話：夢の中にて

なんか立っていた、また真っ白な訳のわからん空間に。
でも今回は4歳児の姿で。いや、今度は誰がこんなところに呼び出しやがったんだ？夢か？夢なのか？

「ふむ、誰かがいると思えばただの人間の童か」
ん？アンタ誰？

「ほう・・・、この空間にいても精神が狂わぬとは面白い童だ」
え？そんなにここ危ないの？

「まぁな。とりあえず汝のような脆弱な人の身では無理な話のはずだ」
へ～、まぁ特に問題もないみたいだしいっか。

「くっ・・・はははっ！！！本当に面白い童だ。それに汝は魔法を使えるようだな？」
は？いや、俺に出来るのは魔力をコントロールすることだぞ？

「む？しかし汝には魔法を使うもの特有の匂いがするぞ？」
えっ！？俺なんか変なにおいする？

「いや、我らにしかわからぬ匂いだから気にしなくてもよい」
そう・・・。

「しかし、自覚なしに魔法を使いこの空間にいるということは・・・」

あれ？なんか考え事か？

「よし、童よ」

何？

「汝の名は？」

俺か？俺はショーゴだ。

「そうか。では、ショーゴ。汝を我の契約者として迎える。我は精霊王、すべての精霊の頂点に立つ存在なり」

・・・まてまてまて！！そもそも俺は魔法とかに関してはよく知らんがお前ヤバい程すげー奴だろ！！

「まぁ、その歳ですべてを知っていたら驚くべきことだがな。そういうことに関しては同族に教えてもらえ」

まぁいい。で？あんたの名前は？精霊王なんて味気ない名前だけじゃないだろう？

「・・・」

あれ？まさか・・・

「ないが・・・なにか？」

・・・すまん。なら俺が付けてもいいか？

「汝が？」

おう。まぁ、ニックネームみたいなもんだ。

「そうか。ならば頼む」

よし、任せろ・・・そうだな、今日からお前はリンだ。

「リン・・・まぁ悪くない」
そうかい。そりゃよかった。

「ではショーゴ、これからよろしく頼む」
こちらこそな。

「そろそろ汝も眼がさめるころだ」
そうなのか？

「ああ。それではまた会おう」
おう。またな～。

第7話：小動物チックな行動に癒される（前書き）

いいサブタイトルが思いつかない・・・orz

第7話：小動物チックな行動に癒される

今まで寝ていたのがウソだったかのようにパッチリと目が覚める。
身体はどうやら回復したようだ。
精神的にはリンと話していたため微妙に疲れが残ってる気がする。
そんなことを思ってると誰かが部屋の中に入ってくる。
銀色の髪を腰辺りまで伸ばした、何処となくセリアと似てる人だ。
多分母親だと思う。

「あら、起きていたの。ありがとうね、セリアを助けてくれて。私はこの子のお母さんのリシアよ」
ふわっという音が聞こえてきそうな笑みを浮かべながらセリアのお母さんのリシアさんは言う。

「まぁ、俺もあいつらの行動にキレただけなんでお礼を言われるようなことではないですよ」
そういや、あいつらってどうなったんだろ？どうでもいいけどさ。

「あらあら、そう。それにしてはセリアはあなたによく懐いているわね。その子私たち家族以外には心を開かなくて困ってたのだけれど」
・・・セリア。まぁ、極度の人見知りと考えればいいの・・・か？

「ちゃんと友達になろうという気持ちで接すれば大抵の人は心は開いてくれると思うんですけど？」
小さい子供にはそのままの心で接しれば大体心を開いてくれるもんなんだが・・・。

「ふふっ。あなたはきれいな心を持ってるようね」
はい？いきなりどうしたんだ？この人・・・。

「いや、俺も人間ですから一般に善と呼ばれる行動もしますし、そのまた逆もします。ぶっちゃけ俺のやりたいようにやる自己中心的な何処にでもいる子供ですよ」
この歳でここまで考えて行動する子供がいるとは思わないが・・・。

「面白い子ね。セリアが心を開くのもわかるわ」
いや、俺には何で今のでそんなことがわかるのかが理解できません。

「これからこの子をよろしくね？」

「友達ですし任せてください」

「ありがとう。なら、その子が起きたら呼びに来てね。職員室にいると思うから」
そう言ってリシアさんは部屋から出て行った。

それから数分後、セリアが目を覚ます。

「おはよーさん」
俺の上に乗ってるセリアに言う。

「うみゅぅ・・・」
寝ぼけてるのか、目をこすりながら変な鳴き声をあげる。その後、俺の顔を見て、なんか見つめ合う。

３０秒位だろうか、見つめ合っているとセリアは胸に顔を押し付ける。なんか猫みたいで可愛いなぁ。

っと、セリアも起きたし職員室へ向かわねば。

そのことをセリアに伝えると、

「もうちょっと・・・」

しかし、このままでは多分永遠にループが発生して帰れない気がする。

「ほら、明日があるからさ」

しかし、セリアは動かない。

それから、何度か呼びかけてみたがセリアは動こうとしない。はぁ・・・そんなに懐かれる要素があったか？

まぁ、それは今は横に置いておこう。とりあえず動く気がないなら少し強引にでも動かさせてもらおうか。

イメージを開始。セリアの下から風が吹き、軽くするように魔力をコントロールする。すると、セリアの体が少しだけ浮き上がる。それに、俺の筋力でも持てるくらいに軽くなる。

しかし、体格の問題上で抱っことおんぶは無理であることが判明。

と言うわけで、肩と膝裏に腕を通し持ち上げる。俗に言うお姫様だっこと言うやつだ。

ちなみに、セリアは顔を赤くして俺の胸に顔を当てたままである。

ほんと一つ一つの動作に癒される・・・。

「リシアさ～ん、セリア起きましたよ～」
両手がふさがってるため足と風の補助で扉を開ける。子供の脚力じゃ開かないんだよな・・・。

中を見ると、何故かウチの両親とほとんどの先生がいらっしゃった・・・が、皆の俺を見る目がおかしい。主には温度が。

リシアさんは先ほどからずっとニコニコと笑ってる。どうしたんだろう・・・？

「あらあら、仲好さんね二人とも」
・・・そうか。まだお姫様だっこ状態のままだったな。

結論が出た後、セリアを足の方からゆっくり下ろす。これで一人で立てるだろう？と思ったのだが、セリアは俺から抱きついたまま離れない。

周りの大人たちはそんな俺達の様子を見てほほえましいものを見るような目で見守りつづける。

はぁ・・・どうすんだ？この状況・・・。

第8話：まさかの無双可能？（前書き）

なんかこのままではショーゴ、セリア両名の描写が書けそうにないのでここに載せときます。

ショーゴ

藍色の髪を腰辺りまで伸ばしている。目も同じ藍色。目は釣り眼気味だが、そこまで強気な印象は受けない。

セリア

紫がかった銀髪。肩甲骨辺りまで伸ばしている。きれいな蒼色の目。若干たれ目。そのせいかはわからないがいつも眠そうに見える。

とりあえずこんな感じ？もし描けたら載せます。もしくは描けるという方がいらっしゃったら申し出てください。多分絵心のない筆者では不可能に近いので。

第8話：まさかの無双可能？

魔法とは精霊の力の一端を利用して起こす現象である。
これは世界の一部ともいえる精霊の力を利用するため破格の威力を得る。
しかし、一端と言えども世界の一部。並みの精神力では扱うことができない。

ので、人間達はより簡単に力を利用するために魔術を作った。
意味を持った陣を媒介にする事により普通の人でも精霊の力を行使する事が出来るようになった。

魔術は魔法よりも行使に制限が多いため、補助系の効果を持つものが多い。

～魔法と魔術について入門編～

「ふぅ・・・」
今読んでいた本を閉じる。
幼稚園から帰ると両親から渡され読むように言われたので読んでいた。
読んだ後に言うのもなんだが、この本四歳児が読む本じゃねぇ・・・。

まぁ、魔法とかについてわかったからいいけどな。

しかし、魔法はあんまし漫画とかのように乱発は出来そうもないな。
燃費とか悪そうだし。

『いや、汝はできるぞ？』

「おわっ！！」
虚空から聞こえた声にびっくりして声を上げる。

『？どうしたのだ』
よくよく聞けばリンの声のようだ。

「急に話しかけられてビビったんだよ・・・」

『そうか。それは済まないことをした』

「いや、次からは気をつけてくれ。それで？何が俺だったら大丈夫なんだ？」

『うむ。その前にショーゴ』

「なんだ？」

『我と話すときは心の中で念じれば通じるぞ？』

「マジ？」

『本当だ』

『あ～、テステス。聞こえる？』

『うむ。さすがじゃな。1度で成功させるとは』

『あれ？これって難しかったりするのか？』

『一応な。まぁ汝は我とつながっておるから普通よりは簡単になっておるが』

『そうか。まぁそれは置いといて、何が俺なら大丈夫なんだ？』

『魔法を多用することじゃ』

『・・・そんなに俺って魔力あんの？』

『とりあえずじゃな、まず我の部屋に入ることだけでも膨大な魔力がいる。まぁ、それが人が持ちうる最高レベルの魔力じゃろうな。そのうえで汝は自我を保った。更に我と契約をなしたことにより・・・まぁ上級程度の精霊並みには持っておる。我も契約してから気づいたことじゃがな』

『・・・俺って人間？』

『身体の構造上はまだ人間と呼べるじゃろうが・・・』

『魔力の大きさとかって他の人にばれたりするのか？』

『いや、専用の道具を使わねばばれぬだろう。使われても我が誤魔化してやろう』

『・・・助かる』

『なに、初めて人と契約をしたのだ。その主をただの人間程度に好き勝手されてたまるものか』

『ありがとな』

『・・・別に礼など要らぬ。当然のことをするまでじゃ』

『それでもだ』

『・・・ふん』

とりあえず、今の自分の状態把握と対応に関しては考えた。

で、リンと話した結果、魔法使いとしてより魔術使いとして表向きは過ごすことに決める。魔法も使えるが、魔術をメインにする戦闘スタイルの人もいるらしいので俺もそれで行くことにする。

ぶっちゃけどれくらい同年代、および普通の人が魔法を使えるのかわからなかったので、なし崩し的にそうすることになった。

魔法に関してはリンが教えてくれるそうなので万事オッケーだ。

というわけで、本を返すついでに自分でそう考えた旨を両親に伝える。

両親も俺がそう考えたのなら頑張りなさい。とのこと。今度は魔術の本を貸してもらえた。

今更だが、両親って何してんだろ？これだけ魔法とか魔術関連の本をポンポン出してくるんだからどっちかがなんかやってたのかな？

今度そのことを聞いてみよ。

とりあえず、今はこの本を読破しよう。

第9話：風の精霊シルフ

「そろそろ精霊と契約するか」
魔術の練習に勤しんでる時にリンが突然そんなことを言い出した。
今いる場所はリンと初めて会った空間だ。ここなら眠っているときにいつでもこられるそうなので昼寝の時間などに何時も来ている。

「どうした？急に」
いつも彼女は横に立ってるだけなのに。

「何。思った以上に汝ができるのでな。予定を繰り上げようと思ってな」

「ふ～ん。まぁ特に異存はないけど」

「なら準備するから少し待っていろ」
そういってリンはどこかへ消える。

今からやろうとする予定のこととは精霊との契約である。
それは言葉通りの意味で、各属性の精霊と契約することだ。
今の状態では魔力を変換させ、風や火などを起こすことはできても魔法を行使することはできないらしい。
なので、普通の人が無条件にしているように、俺も人為的にそれをやろうとしているのだ。
今回は一番適性のある風属性。最終的には全属性と契約するらしい。
というか、リンがさせるとか言っている。

「準備ができた。こっちに来い」

どうやら準備が終わったようなのでリンの元へ向かう。そこには何やら見たことのない魔法陣が空中に一つ、地面に一つ描かれている。

「空中のが精霊とこの部屋をつなげる扉、地面のが契約用の魔法陣だ」

へ～・・・そんなもんがあるなんてびっくり・・・というか誰もできないんだから作られているのはおかしいのだが・・・。

「我が作ったのだ。最近汝のやっていたことを眺めていたのはこれの為だ」

あ～・・・魔術の陣を見てたのか。すげーな、あれだけの情報でまったく異なる陣を創り出すとか。

「魔法・魔術は我自身ともいえるからな。法則性さえつかめばこの程度、造作もない」

おおう・・・そういやそうだったね。

「まぁ、さっさと契約するのが良いだろう。何、汝と波長が一番にあった属性だ。簡単に済む」

そういうもんなんかね・・・。とりあえず始めよっか。

「うむ・・・精霊よ、我が声が届くのならば応え、現れよ」

リンがそう言うと、空中の魔法陣が輝く。少し眩しいので手で目を覆う。

光が収まると俺の半分くらいの身長の白いワンピースを着た緑色の長い髪を持った少女がいた。

「リン、この子が精霊なのか？」

「うむ、まぁ特に精霊に決まった形というものはないからな。汝ら

とあまり変わらないように姿を調整させておいた」
へ～、と俺がリンの言葉に納得していると、精霊の子が口を開く。
「精霊王、この人の子は・・・？」
精霊王の空間に人が存在することがありえないことで、さらに子供とあれば不審がるのもまぁわかる気がする。
「我が生まれて初めての契約者じゃ」
「！！！」
まぁそんな反応ですよね～、普通の人だと・・・いやまぁこの子は精霊だが。
「驚くのも無理はない現にこうなっておるのだ。それにショーゴは面白いぞ」
「面白い・・・ですか？」
「本質を見ればわかる。異常の異常。すでに人間やめとるとしか言えんぞ」
「まて、その説明の仕方には断固抗議を申し立てる！」
そんな評価のされ方は嫌過ぎる！
そんな俺の講義もスルーし、リンはその子に促す。
で、その子の表情が疑惑→驚愕→呆然→呆れと変化していった。
ぶっちゃけ最後の表情を見たとき目から汗が流れたよ？
「凄いと言うべきなのかおかしいと言うべきなのか・・・」

「まぁ、これで汝が呼び出された意味がわかったな？」

「ええ。わかりました」

「ショーゴ、こちらへ来い」
二人の会話が終わるまで「の」の字でもエンドレスに書いておこうと思った矢先に呼ばれた。
無視するわけにもいかないのでリンたちがいる契約用魔法陣の近くに行く。

「ではこれから契約をするぞ」
人が心の準備とかそういうのを考慮することなくリンは言った瞬間から何か呪を紡ぐ。何言ってんのかさっぱりだ。人が理解できるものではないんだろう。

「では互いに真名の交換を。それでこの契約は完了する」
さて、どちらからこれは名乗るのか・・・ここはやっぱり俺からか？などと思っていると、

「私は風を司る精霊、シルフです」
先に名乗ってくれた。というわけで次は俺の番。

「え～と俺は・・・」
あれ？この場合前世の名前なのか今の名前なのか・・・と、悩む前に自分の前の名前が思い出せんみたいだな。
なら答えは一つ。

「俺は精霊王の契約者、ショーゴ・・・でいいのか？」

「まぁ始めのはいらんがな・・・ここに我の名において契約を結ぶ」

その言葉と同時に自分の中に何かが入り込むというか繋がったというか・・・まぁさっきまでと違うのだけはわかる。

「これにて契約は終了じゃ」

「ん、ありがとな。リン・・・とシルフ、で良いか？」

「ええ、ではこちらはショーゴ、とお呼びしますね」

「ああ」

「では私自身の力が必要となりましたらいつでもお呼びください」

「わかった。そんときはよろしく頼む」

「ええ、それでは」

そう言ってシルフは空中の魔法陣に飛び込み、そのまま消え去った。

第9話：風の精霊シルフ（後書き）

久々の投稿・・・。何を書くか迷ってしまった。
とりあえずアンケートというか、これからどうするか。
1、もうチョイ幼少期を続ける。
2、本題である学院にさっさと進ませる
どっちがいいですかねぇ・・・。1の場合はなんかいいイベントとかあったらよろしくです。
ない場合は・・・作者が頑張りますw

第１０話：どうしてこうなった・・・（前書き）

更新久々ですいません・・・。主人公の設定（まかいぞう）を考えてたらこんな時期に・・・。

これからはもう少し頻度を上げていきます。後、これからですが適度に幼少期を続けます。

第１０話：どうしてこうなった・・・

シルフとの契約も終え、さあ魔法を練習しようではないか！と思った矢先、

「あまり一度に行うのもよくない。今回はこの辺で良いだろう」
とリンが言う。落ち着いてみると存外精神的疲労もあるので、リンの言葉に頷く。

「ではいくぞ」
そうリンが言うと同時に視界はだんだんとぼやけ、体の感覚は鈍くなり、最終的には気を失う感じでこの空間から消え去った。

時は流れ三カ月位。シルフとリンから色々習いつつ着々とそれらを覚えて行った。おかげで風属性はほぼマスターした。
リンたちには「なんでそんなに早く覚えれるんですか（るんだ）！！」と怒られた。おかしくね？頑張っただけなのに・・・。
で、今日は休日。この前両親に「どんな仕事してるの？」と聞いたところ・・・

「さ、どこからでも掛かってこい！」
父さんとの模擬戦になってしまった・・・。どうやら戦闘を主とする職らしい、ということしか今のところはわかっていない。

「どうしたんだ？」

「いや・・・なんでもないよ」

とりあえず今は保留。後で教えてもらえるんなら目の前の父さんに集中しよう。

しかし、最近リンやシルフとも模擬戦をするようになったのである程度相手の実力を測れるくらいにはなったんだが・・・

まったく隙が見当たらない。うん、これどっから攻めればいいの？

『とりあえず外から狙って見ればいいのでは？』

最近よく近くにいるシルフからの助言。まぁそれしかないか。

「≪弾一風（バレット）≫」

自分の周りに１０個ほど魔力によって作った風の弾を作る。基本的に自前の魔力（オド）ではなく大気中の魔力（マナ）によって形成するため結構燃費のいいポピュラーな下級魔法である。どの属性にもあるらしい。

「行け！」

俺の声と共に１０個の弾が飛ぶ。そのうち４個は父さんの左右に広がり挟むように飛び、残りは直線状に父さんに迫る。が、

「せいっ！」

手に持った木刀で一閃。それだけで全て破壊された。

「まじか・・・」

見た目以上に威力はあったと思ったんだが・・・。というか木刀の強度が異常だろ。

『汝の親なんじゃから予想できるくらいだの。木刀は気で強化してあるのじゃろう』
リンからはなんとも言えない評価と推測。

「この程度か？」
持った木刀を肩に担ぎ、ニヤニヤしながら言う。いや～・・・めっさ余裕そうな顔してんなぁ・・・。

『丁度いい。あれをすればよいじゃろう』
え？今ここで？

『うむ。汝が我にしたようにな』
う～む・・・。俺はいいんだが・・・シルフはいいのか？

『ええ、私としてはそちらの方が好ましいです。あなたのことはこの三カ月でよくわかりましたから』
ふむ。そうか・・・ならリン。

『わかっておる。あ奴の相手は我に任せよ』
うん、頼んだ。

『それでは行きますよ？』
シルフがそう言うと俺の意識は薄れて行った・・・。

第１０話：どうしてこうなった・・・（後書き）

あれです。次回この小説初めてのまともな戦闘描写になります。てかようやく魔法登場・・・一つですがね。

第１１話：父さんの非常識っ！！（前書き）

サブタイはきっと主人公の気持ち

第１１話：父さんの非常識っ！！

何もない空間ザ・サード・・・というわけではなく今回は草原っぽいところにシルフと俺二人が向かい合わせに立っている。

「えっと・・・じゃあいいか？」

「ええ、私はいつでもいいです」
最後の確認としてシルフに聞くが、決意は変わらない様子。まぁ、ここまで言うならいっか。

「風の精霊シルフ。汝は我、ショーゴを契約者として認めるか？」

「ええ」

「では、新たな名を授けよう。汝が名はウィン」
そう俺が言った瞬間、こう・・・す～っとした感覚が俺の中に生まれる。

「ありがとうございます。これより私は【ウィン】となりあなたに我が身を捧げます」
シルフ・・・これからはウィンがそう言うと、彼女の周りに光と風が巻き起こる。それらが晴れると、そこには緑色の髪をポニーテールにし、白いシャツの上にフード付きの旅人のような外套を羽織り、アニメのキャラ並みに短いミニスカートの姿で立っていた。

「この世界にそんな恰好あったっけ？」
そんな恰好が女の子の標準だとしたらおじさんはびっくりだよ。

「いえ、あなたの記憶から私が似合いそうな格好を探した結果がこれなのですが・・・だめですか？」

「いや、そんなことはないけどさ」

めっちゃ似合ってるけどさ・・・あれだ、思春期の少年には目に毒

「ショーゴはそんな歳ではないでしょう」・・・。

「いいじゃないですか。それよりも大丈夫ですね？」

「・・・まぁ言われた通りのことはできる感じがするよ」

「結構です。では戻りましょう」

「りょーかい」

そう答えてその空間から俺とシルフは出た。

『ようやく帰ってきおったか』

意識が戻ると早々にリンからの出迎えコール。

「ありがと、リン。大丈夫だった？」

『我を誰だと思っておる。足止め程度ならば簡単なことじゃ』

「そうだな」

『それよりもさっさとせんとまた攻められるぞ？』

「それはまずいな。もう少し足止めよろしく」

『ふむ、貸し一じゃ。さっさとせいよ』

「もち」

それを最後に念話は終える。ちなみに目はつむったまま。まだやることがあるからな。

「それじゃウィン、行くぞ」

『ええ』

集中集中・・・頭の中には心に思い浮かんだ風の槍。それを思い描きながら手を横に出す。

「我は請う・・・風槍≪アイオロス≫」

魔力を練り、俺の手に1本の槍、それは銀色の柄に十字の刃、真中には翡翠石のような緑色の石が嵌っている。そして、それと俺の後ろに2本手の中と同じ槍が浮かぶ。

「そりゃ・・・なんだ？ショーゴ」

いきなり魔力の反応もなしに槍が現れたらだれでも警戒する。というかこれできる人俺だけだろうから余計にだろう。

「俺の切り札だよ、父さん」

そう言って手にもった槍を構える。それを見て父さんは獰猛な笑みを口に浮かべ、

「ほう、面白い。見せてもらおうじゃねーか」

さっきまでとは違い、威圧感たっぷりに半身に構える。

それを見て、俺は一気に駆ける。これを出しているときには風の加護を強く受けるそうなのでいつもより数倍速く動くことができる。

しかし、父さんにとってはこれが普通の手加減した程度のスピード。まぁ、今の俺の体つきではしょうがない。戦闘職の父さんに敵うはずがないのだ。

現に軽く驚いた顔をしているが、普通に直撃コースで一太刀を浴びせてくる。というか当たったら俺がお陀仏な威力だと思うんだが・・・。

まぁでも、今の俺には関係ない。

俺が左手を振るうと今まで後ろに追随してきていた2本の槍の片っぽが弾くように振られる。イメージが弱かったのか少し軌道を逸らしただけで弾かれるが、それで十分。俺の周りに起こる不自然な風によって外へ流される。

それを視覚ではなく、周りの風とシンクロした俺の感覚で感じつつ手の槍を横なぎに振るう。それと同時にノーモーションで挟撃するように浮かんでいた2本の槍も放つ。

「チェックメ「おっと、それはどうかな？」えっ？」

知覚もできない速度でいつの間にか後ろに回って俺の首に木刀を当てている父さん・・・。

「いやぁ、まさかお前がこんなに強くなってるとはなぁ～。思わず魔法を使っちまった」

がはは、と優しそうな顔に似合わない豪快な笑いを見せる。

『・・・さっき父さんの使った魔法についてわかる人～』

とりあえず俺の肩をバンバン叩いてる父さんを受け流しつつ、最近できるようになった並列思考を駆使し、リンとウィンに聞いてみる。

『魔力の波長から察するに・・・雷属性ですね』

『ふむ・・・どうやらオリジナルじゃな。おそらく一瞬じゃが雷と同じ速度で移動しておるな』

『・・・ありえん』

『まぁお主はまだ若い。今の汝ではなく未来の汝なら勝てるよ』

『ありがと・・・』

『これもいい経験です。何事も成功ばかりでは身にはつきませんし』

『そうだな・・・よし！これを教訓にまた頑張ろう！』

『その意気じゃ』

『ええ。頑張りましょう』

あの後父さんと二人で風呂で汗を流した後、ご飯となる。

「よし、じゃあ俺と母さんの職業を教えてやろう」

飯を食いながら父さんは言う。母さんは今デザートを作っていて居

間にはいない。

「ずばりな・・・冒険者だ」

冒険者とはこの世界において最も就業率と死亡率が高い職業である。その仕事内容は様々で、子供のお使いレベルから国が総力を挙げるレベルまである。まぁ後者は一生に一度あるかないかのおおごとではあるのだが。

まぁ詳しいことは省く。どうせまた話すことになるのだから。

それは置いておいて、冒険者か・・・。まぁ父さんにはお似合いか。好奇心旺盛だし、子供っぽいから天職だろうな。

「むぅ・・・そこまで驚いた感がないな」

「父さんにはぴったりすぎる職業だよ」

それもそうか・・・。と呟く父さんを放置し、母さんの作った料理を食べる。今日はとんかつっぽい物定食である。『ぽい』というのは豚ではない、酷似した生き物の肉であるから。

美味いことに変わりはないのでどうでもいいけど。

「ちなみにランクはAだ」

その言葉を聞いて父さんにちょうど飲んでたお茶を吹いてぶっかける。

「うわっ！お前なにすんだっ！」

「むしろ父さんが何言ってんだよ！Aランクって・・・」

冒険者だがランク付けがあり、最低はGランクから最高のSまである。

Aランクというのは全体の1～3％程度の人数しかいないめちゃく

ちゃ強い人たちである。国の一大イベント時にも国に呼び寄せられるくらい凄いのである。
それを自分の両親がやっているとは・・・人はみかけによらないな。

「まぁそう思うのも仕方ないわよ」
そう言いながら居間に入ってきたのは母さん。

「いきなりそんなこと言われたって驚くにきまってるじゃない。というより驚かせたいがために今までいってなかったんじゃなかったかしら？」
そう母さんが言うと、そう言えばそうだった。と思いだしたかのように父さんは言う。どうせ途中からは話すの面倒だとかなんだとかで話さなかったに違いない。

「母さんはショーゴと同じ魔術メインの魔法使い。父さんは見ての通りの剣士よ」
ふむ・・・見た目からも性格的にもそれが妥当だろうな。

「でもこいつ前衛もいけるぞ？」

「そうね・・・どう教えようかしら」
どうやら両親もこれからは教えてくれるらしい。学ぶ場が多いことはいいことだよな。

「面倒だから両方で良いじゃねえか。隠し玉ってことで接近戦もできればかっこいいだろうし」
父さんのそんなお言葉。適当にも程があるだろ。

「そうね。魔法はどうしようもないけど」

「まぁな。俺は雷、お前は水だからな」
というより俺に属性もくそもないんだけどね。いっそのこと両親にはばらしてやろうか・・・やらない方がいいだろうからやらないけど。

「ま、そういうことは明日からだ。ショーゴ、今日はとりあえず遊ぶぞ！さっさと飯を食え！」
俺にそう言って父さんはがつがつと食べ進めていく。まったく・・・昼休みに早く遊びに行きたくて昼飯を早食いする小学生か？この人は・・・。まぁ面白いからいいけどさ。

さて、俺もさっさと遊びたいし早く食べよう。別に俺は子供だからこういうことしてもいいよな？

第１１話：父さんの非常識っ！！（後書き）

戦闘描写・・・上手く出来てない気がする。うん。
そして両親の職業判明。てか以前出てきたときにはこんな性格ではなかったはず・・・汗
どうしよっか・・・。

第１２話：散策・・・だったのになぁ（前書き）

すみません。一か月放置してて・・・。
話の構想はできていたのですが、それを文章にするのに手間取りました。次回はもっと早くに投稿できるようにします。

第１２話：散策・・・だったのになぁ

今日は街へと出てきている。今までは一人で出ることは禁止されていたが、この間父さんと戦った後、許可が出た。
ので、今まで親に付いて回っていた時じっくりと見れてなかったところを見ていこうと思う。

この街は首都のベルベニア。一応王宮みたいなのもあって、王族もいる。政治体系は半世襲制みたいな感じ。日本で言うなら総理大臣は変わんないけど、その他の議員は普通に民衆から立候補と投票で選ばれるといったところ。

いま俺が歩いているのは首都としてふさわしい大通り。旅人を対象としたお土産屋さんみたいなところもあるし、武器屋とか食料品店とか色々ある。大抵のものはここで揃うと言ってもいい。まぁ旅慣れた人とかは裏通りの方へ行くのだろう。
あっちは人の目に触れない分多少法に触れてたり触れてなかったりする店が多い。大体がグレーな営業の仕方だ。まぁ、その分表通りでは手に入らないような魔法具などを手に入れることもできる。まぁ厄介事に巻き込まれる可能性も上がるけどさ。

さっきの言葉がフラグだったのだろうか？

「どうした坊ちゃん。今更怖気づいたか？」
目の前にいる男はゲヘヘと生理的に受け付けれそうもない笑い声を上げながらこちらに近づいてくる。
それを見て俺の後ろにいる少女は俺の服を一層強く掴む。はてさて・・・なんでこうなったんだか。

事の発端は表通りから外れて裏に来てしまったことだろう。ここには職にあぶれたものたちがうろうろしている。あぶれたと言っても、大体が『働いたら負け』みたいな精神の人達ではあるが。
そんなホームレスの群れが居る所を俺は堂々と歩いて行く。理由？そんなん好奇心から1割、迷ったのが9割だ。ぶっちゃけてしまえば迷ってここに入ったからこそ開き直って興味が湧いたと言うところだが。
『アホだの。ショーゴは』
うるさいリン。そんなの俺自身が一番わかってる。だけどどうしようもないじゃないか。表通りに戻れないんだから。
『だからといって風を操って自分の周囲だけ清潔に保つのはどうか

と思いますよ？』
しょうがないだろ？ウィン。ここがちゃんと清掃されてないのが悪い。上の奴らが公共事業としてこいつら雇ってここを掃除させればいいんだ。それで全て解決さ。

『無茶を言うな・・・汝は』

まぁそんな無駄話をしながら迷走を続けていたのだが、何となく悲鳴みたいなものが聞こえてきた気がする。

『ショーゴ。先ほどの声、聞こえましたか？』
どうやら聞き間違いではなかったらしい。

「場所、わかるか？」

『ええ。あっちです』
ウィンのナビゲートで声の発信地へ向かうと、そこには、

「おとなしくしなぁ、お嬢ちゃん」
手にナイフを持っているキモいおっさんと、

「いや・・・いや！！」
そのナイフで服を斬り裂かれたであろう少女がいた・・・。

はい回想終了。この間実に1秒未満。いや～最近は詠唱を加速するために思考速度を上げてみたからこんな芸当も可能になったんですよ？

『現実逃避しておる場合か。さっさと片付けろ』

『そうですよ。目障りですからさっさと消してください』

精霊二柱から酷いお言葉。相手に聞こえないからってひでー言いようだ。

まぁその意見には同意だが。

ささっと片付けてこの少女に表通りまでの道を聞こう。その辺の浮浪者と違ってまともそうな子だし。

そうときまれば、さくっと行こう。

「≪風よ≫」

超短縮呪文。元の威力より大幅に落ちるが今はこの程度で十分。俺が腕を振るうと風の刃が相手を襲う。

「ぎゃああ！！」

流れ出る血の量はしょぼいが五月蠅い悲鳴をあげるおっさん。この程度でガタガタ五月蠅い。更に腕をふるいアキレス腱を切る。更に五月蠅い悲鳴をあげる。

「≪奴を黙らせろ。沈黙（サイレス）≫」

適当な呪文だと思うが、元々呪文というのは脳内のイメージをより

確かなものにするために使用する。ので、使用者がやりやすいなら大体適当なもので良いのだ。
まぁ大体の奴は教科書通りの使い方ではあるが。

静かになったおっさんを通りの端へ蹴り飛ばし、改めて少女の方へ向く・・・がすぐに首をねじ切らんとばかりに百八十度回す。

理由は・・・服がほとんどないんだよ。いくら俺が精神的に大人といえども、相手にとっては同い年。裸同然の姿を見られるのは嫌だろう。そう思っての行動だ。

「どうしたの？」
しかし、少女は特に何も思わないのか周りこんで俺の顔を覗き込む。

『ショーゴ、汝の歳はいくつじゃと思っておる』
五歳だが？

『その歳で異性云々の観念を持ってると思うのですか？あなたは』
ウィンが呆れたような声でそう言う。そんなもんだっけ？

『そんなもんじゃよ』
そーなのかー。まぁ、そう言うことならいっか。
そう結論付けてから改めて少女を見る。腰辺りまで届くであろう赤色の髪を後ろでポニーテールにしている。目は橙色。そして何より特徴的なのが耳。犬耳である。尻尾も生えている。髪は人間の耳があるところまでかかってるので見えにくいが人間と同じものはない。
まぁ獣人はそんなもんだって聞いてたけどさ。

まぁ少女の説明はこの辺にしておこう。

「大丈夫か？」
そう言いながら俺は羽織っていた上着を渡す。俺が来ているのは黒色のジャージのようなもので動くのにとても適している服だ。まぁ普通はこんなので外に出る人はいないだろうが、前世では私服＝ジャージだったものだからなれている。人の視線がうっとうしいことこの上ないが。

まぁ、そんなジャージっぽいそれを少女は少し見、俺の目を見、

「あ、ありがとう・・・」
おずおずと手にとって着た。

まぁこれでとりあえず変態がよることはないだろう・・・下手したらこっちのほうがエロいかもしれんが。

「ところで、なんでこんなとこにいるの？子供には危ないところだと思うんだけど」
自分の年齢は棚に上げて少女に聞く。まぁ・・・俺は大丈夫だろ？精神的に戦力的にさ。

「あなたも人のことを言えないと思うけど・・・わたしは孤児院に帰る途中で、ここを通った方が近道だからいつも通ってて、今日に限って・・・」
そこまで言って先ほどの男のことを思い出したのか顔が真っ青になる。まぁ、本能的にヤバいと思ったんだろ。女としてなのか獣としてなのかはわからんけど。

「そかそか。その孤児院ってどの辺にあるの？」
聞くとどうやら表通りに近いところにあるようなので送ることに。さっきみたいなことがあってもいけないしな。

そう伝えると、「・・・うん。お願い」と少女は言った。

「そういえば名前を言ってなかったな。俺はショーゴ。君は？」
短い付き合いになるかもしれないが、せっかくの縁だ。名前を聞いておこうと思い、自己紹介。

「わたしはユーリィ。よろしくね」
そう言ってユーリィは手をこちらに差し出す。握手かな？と思いその手を握ると、

「さ、いこっ！！」
俺を引っ張って走り出した。

「ここが孤児院？」

「うん、そう」
あれから半刻程かけてユーリィの住んでいる孤児院にやってきた。
いつもならこの1／2か1／3程度の時間で来れるらしい。今回は俺がいたためゆっくりにしたんだと。

「みんなただいまー！」
俺と手をつないでいるのを忘れているのか、そのまま孤児院の中へと入っていく。

「おじゃまし ま〜す」

探知（サーチ）すると奥に人の反応があったので、入る時にそう言っておく。

「お帰りなさい・・・ってその服どうしたの！？」

院長さんだと思われる女性がユーリィを迎えに来たのだろう。玄関にまでやってきての一言。まぁ服がぼろぼろになってたらしょうがない反応だ。

「ちょっと・・・ね。でも、ショーゴが助けてくれたの！」

「ども・・・ショーゴです」

手を引っ張られ院長さん（仮）の前に出されたの挨拶する。

「そう・・・ユーリィ。あなたは着替えてらっしゃい。ちょっと私はショーゴくんとお話があるから」

「わかった！ショーゴ、後でね！」

そう言ってユーリィは部屋へと走って行った。

「さて、ショーゴくん。ついてきて下さい」

院長さん（仮）が歩きだしたので、それについて行く。ついたのは院長さん（仮）の書斎。机の上には様々な書類が置いてある。ちらっと見てみたがここの経営にかんするものだった。

「ごめんなさいね。何も出せないけど」

「いえ、別に気にしていただかなくても」

むしろ五歳児相手にそんな客人に対する応対はしなくてもいいと思う。俺は。

「ありがとう。私はここの院長をやってるミュゼットよ。それで、

わたしが聞きたいのはあの子になにがあったのか、ということ。きっと酷い目に会ってきたのでしょう？」

「ええ。まぁ・・・」

「あの子、凄く怯えてるようだったからきっと話してくれないでしょう。だから教えてもらえます？」

「わかりました」

そこからは俺がみたことをそのまま話す。

話が終わるころには、ふぅ。とため息をついていた。

「あの子が無事でよかった・・・。ショーゴくんもあの子を助けてくれてありがとう」

そう言って院長さんは頭を下げる。

「どういたしましてです」

「わたしからはもう終わりよ。あの子のところに行ってあげてくれる？わたしはちょっと仕事があるから行けれないけど」

そう言ってミュゼットさんは書類の乗った机へと向かう。俺はそれの邪魔にならないように部屋から静かに出た。

「あ、ショーゴ！」

廊下に出ると、ユーリィがちょうど居てこちらに駆け寄ってくる。

「お話は終わったの？」

「終わったよ」
そう言うとユーリィは笑顔になり、
「じゃあ遊ぼ！」
俺の手を握る。特に断る必要性もない。ので俺はそれを了承した。

あれから数時間、孤児院の子供全員を巻き込んで遊びに遊びまくった。
「もう帰るの・・・？」
犬耳をペタンと伏せ、悲しげな表情になってユーリィは言う。
「別にもう会えないってわけじゃないさ。また遊びに来るから元気出せ・・・な？」
いつもセリアにしてるように頭を撫でる。
「はふぅ・・・」
すごく和む表情になっていた。
「ふふ。ユーリィがそこまで気を許すなんてね。歓迎するからまた来てね？」
「ええ、是非。じゃ、またなユーリィ」
「・・・うん」
俺の離した手を見ながら残念そうに言う。後ろ髪をひかれつつも俺

は家へ向かうために歩きだした。

「またねーーー！！絶対来てよーーー！！」

振り向くとブンブンと手と尻尾を振りながらユーリィがいた。それに俺は手を上げて答え、今度こそ家へと向かって歩き出した。

第１２話：散策・・・だったのになぁ（後書き）

後書きに小説内の説明とか質問とかに答えを書くべきだろうか・・・。みなさまはどちらがいいでしょうか。
特に何もないようだったら、ある程度話が進んでからそれだけで投稿します。

第１３話：眠気とセリアの心情と（前書き）

みてみんにてセリア画を上げました。この小説のタイトルで出ると思うのでよかったら見てみてください。下手ですけどね・・・。

第１３話：眠気とセリアの心情と

今日も今日とて元気に登校。両親は仕事で朝早くどっかに行ったので一人で向かう。

「おはようセリア」

「おはよう・・・ショーゴ」

校門まで行くとお母さんと一緒に登校してきたセリアとばったり会う。

「おはよう、ショーゴ君」

「おはようございます、リシアさん」

いつもと変わらない笑みを浮かべながら挨拶をするリシアさん。

挨拶が済むとトテトテトテとセリアがこちらに向かってきて俺の手をつかむ。最早これがデフォとなりつつあるので俺は何も言わない。

「じゃあ今日もよろしくね」

「ええ」

そう言ってリシアさんは帰って行った。それを見えなくなるまでセリアと見つめ、

「じゃ、いこうか」

「うん」

俺達も向かうことにした。

さて、この幼稚園的施設では一応クラス分けがされており『シルフ』『イフリート』『ウンディーネ』『ノーム』の四つに分かれている。これらの名前の由来は『風』『火』『水』『地』の精霊の名前からとられている。
このクラス分けは団体行動とか行事の時の為に分けられており、普段は基本的に自由に全員行動している。

その中で俺とセリアはいつも一緒にいる。たまに他のグループに混ぜてもらったりもするが、特定のグループには入ったりはしていない。

今日は他のグループに混ぜてもらったりせず、グラウンドの端っこにある目立たない木の下に座って日向ぼっこをすることに。

昨日も夜遅くまでリンやウィンと話し合っていたため、かなり眠いのだ。ちなみにあの二人は最近俺の力が増えたとかで行動範囲が広くなり、俺の近くから離れられるようになったらしく今はいない。何かあったらわかるそうなので特に気にしたりはしていない。

しかし、眠い。暖かない日差しと心地よい風のせいで意識がとぎれとぎれになる。

そんなとき隣のセリアが急に俺の頭を引っ張り、自分の膝の上に乗せる。

「・・・どうした？」
眠気に負けないように意識をどうにか保ちながら聞く。
「ショーゴ眠そう」
セリアの言葉をどうにか聞き取る。ちょっと危ないかもしれない。
「寝てて、いいよ？」
セリアが優しく俺の髪を梳く。あ～・・・だめだ。
「悪いな・・・」
そう言って俺は眠気に身を任せた。

セリアｓｉｄｅ

私の膝を枕にして気持ちよさそうに眠るショーゴの髪を梳く。さらさらしてて気持ちがいい。癖になりそうだ。
ショーゴは優しい人だ。私は初め、この施設に来たくなかった。それは私の一族に代々伝わる能力のせい。でも、お母さんたちに迷惑をかけたくなかったから来ることにした。隅っこで誰とも関わらなければいいと思って。
でも、なんでかわからないけど男の子たちには怒られて、殴られそうになった時・・・ショーゴが来てくれた。
ショーゴは初めて見た“色”だった。一番近い“色”だと、お父さんかお母さんだった。ショーゴは殴られそうになっていた私を庇い、男の子の手を受け止めて私に話しかけてくれた。
初めは疑問だった。なんで私を助けてくれたんだろう？なんで私と

話すんだろう？
そう思っていると彼は自分の名前を名乗り、私の名前を聞いた。それに答え、彼は私の名前を呼んで私にも自分の名前を言うように言った。ちょっと考え込んだりしたけど、名前を呼んだ。そしたら彼は頭を撫でてくれた。暖かかった。初めは殴られるのかと思ったけど、撫でられて、安心した。
しばらく撫でてくれた後、ショーゴは少年たちと外に出て喧嘩をすることになった。身長も体型も私と同じくらいで、相手の男の子と比べたら小さくて細い。それに人数だって相手の方が多い。
でも、大丈夫だった。何か大きな音がしたと思ったらそこにショーゴがいなくて、いつの間にか男の子たちの後ろにいて、男の子たちを倒していた。その後彼もすぐに倒れてしまったけど。
保健室に行って、ショーゴと一緒に寝た。暖かかった。その時に一緒にいてくれるって言ってくれたことに私は凄くうれしかった。
お母さんも「凄くいい“音色”を持つ子だから仲良くしなさいね？」と言ってた。そのとき、私がいいと思ったら能力のことも話していいって言ってた。

友達のショーゴに秘密は持ちたくない。今日話そうかな？

でもまぁ、今はこの寝顔を見ておこう。

side end

さらさらと風の音がする。頭に何か暖かいものを感じる。目を開けると、微笑みを浮かべて俺の髪を梳くセリアがいた。

そう言えば眠ったんだっけ・・・。

「起きた？」
髪を梳きながらセリアは言う。

「あぁ、ありがとな」
そう言って俺は起き上がる。後ろ髪を引かれる思いだが、存外膝枕というのは負担がかかるそうなので起きる。

「ショーゴ」

「ん？」
グラウンドでワイワイ遊ぶ園児たちを見ながらボーっとしていると、セリアが俺の名を呼ぶ。顔を向けると何やら真剣そうな顔をしている。
どうしたのか、と思いセリアの方に身体も向ける。

「これから私の、私の家のことについて話す」
家・・・？それがどういうことなのか、それはセリアの話を聞けばわかるだろう。そう思い、話すように促す。

そして、セリアは話し始めた。

第１３話：眠気とセリアの心情と（後書き）

う～む・・・何個か話は考えてあるものの、それを文章にすることと何処で出すかに悩む。更新速度を少しでも上げれるように努力します・・・。

第１４話：セリアの秘密

「私のお母さんの家系には代々伝わる能力がある」
セリアはそう切り出した。

「それは人の心や本質を何らかの形で感じること」
人の心や本質を感じる・・・。それがどういうことなのか、と考え
そうになったが話を聞けばわかると思い、思考を断ち切る。

「私は色でみることができる。人の体を囲むように色がついて見え
る。例えば…お母さんやお父さんは暖かいと感じることができる色。
その時の気持ち次第で変わるけれど、何時もそんな風に感じれる」
そこまでセリアは言って不安げな表情をして、

「こんな私は・・・気持ち悪い？」
といった。手の平は震え、すでに涙目のセリア。そんな彼女を俺は
抱きしめる。

「大丈夫だ。そんなことで嫌いになったりはしない。絶対に」
心が色で見えるのがなんだ？別にその程度関係ない。正直リンとか
俺の存在のほうがもっと非常識だ。

「ほん・・・と・・？」

「ああ、もちろんだ」
そう言って安心させるように背中を優しくたたくと、

「・・・っ！」
安堵の気持ちからか、涙があふれ出す。それが収まるまで俺はずっ

と背中を優しくたたいていた。

「落ち着いたか？」
泣きやんだセリアに聞く。

「・・・うん」
そう言いながら俺の胸をギュッと強くつかむ。

「でも・・・まだ顔は見せられない」
セリアはさらに顔も強く押し付ける。そんな彼女の様子に苦笑しながらもそれを受け入れる。

サラサラと頭の上の木の葉が揺れる。遠くのほうで小鳥の囀る声、子供たちのはしゃぐ声。それらを聞きつつセリアの髪に指を通す。サラ～っと流れるその髪を楽しむ。もぞもぞしてるのはくすぐったいのか。

とにもかくにもいつも通り俺の日常は平和だ。

「それじゃ、また明日な」
そう言ってショーゴは私とは逆方向へ歩き出した。私の家と彼の家は逆だから仕方ない。

「うん・・・また明日」
私も彼に同じようにその背中に言う。彼は手を上げてこたえてから
そのまま歩き去って行った。

「セリア、ショーゴ君に話したの？」
隣で歩くお母さんが私に言う。それに私はちょっと顔を赤くしてう
なずいて答える。

「そう、よかったわね」
嬉しそうな笑みを浮かべながらお母さんは言った。

「うん」
なんとなく気恥ずかしくなり俯く。それでも浮かべる表情は笑顔。
お母さんはそのことが分かっているのか笑みを崩さない。

「じゃあ今日は御馳走にしなきゃね。どんなのがいい？セリア」
お母さんの言葉を聞いて私は考える。

今日も私の日常は平和だった。

第１４話：セリアの秘密（後書き）

うぼぁ～……。難しい・・・。チョイ他の小説の設定を再構成してたらこんなにかかってしまいました。しかも短い……。
今回はちょっとシリアス（弱）的なお話でしたが、次回はほのぼのといきます。
次回は・・・犬っ娘ユーリィを出すか新しい精霊を出すか・・・迷う。

第１５話：火の精霊イフリート　前

・今日も今日とて魔法の訓練。場所はいつものリンのとこ。監督はリン及びウィン。三人であーだこーだ言いながら話し合う。内容？もちろん魔法とかのことについて。

「ふむ・・・。ではショーゴ、そろそろ新しい精霊と契約するか」
ある程度話の内容に終わりが見えた頃、リンが突然そんなことを言い出した。

「え？もうやるのか？」
ウィンと契約して約三カ月ほど。もっと時間をかけて行くのかとばかり思っていたのだがそれこそ年単位とかそれくらい。

「それはあなたの習熟度の早さのせいですよ、ショーゴ」
俺の言葉にこたえたのはウィン。垂れ目でも何時も鋭く感じられるその眼には今は呆れたような感情が浮かんでいる。

「どういうことだ？」

「それはですねショーゴ。あなたは風属性に対しての融和性が高すぎるんですよ。たった三ヶ月で基本的な呪文全て覚えるってどういうことですか？ねぇ」
目が怖い。ハイライトが消えてるような気がするほどに怖い。

「落ち着け、ウィン。ショーゴがこういうのであることはある程度予想できたろう」

「リン、これはその予想をはるかにぶっちぎるほどにおかしいです。

私は数年単位かと思ってたんですよ？」

「我だってそうじゃ。まぁ風に関してはほんとに高そうじゃったから他はこうはいかんはずじゃ」

「・・・そうであることを祈りますよ」

はぁ・・・とウィンはため息をつく。精霊にも呆れられてそのうえあんなに怒られるとか俺どうなってんだよ。むしろ俺がため息をつきたかった。

「まぁそういうわけじゃ。風はあらかた終わった。後はもっと改良を加えたりするだけ。なれば新しい属性にも手を出すべきと我は思うのだが？」

リンの言葉を聞いて、まぁそれでいっか。と思う俺は少々適当すぎるのかもしれないが、これが性分なので仕方がない。ひゃっほうキタコレ！みたいなことにはならんが、多少はテンションが上がるのもあるし。

「じゃ、やるか」

「うむ」

俺の言葉にリンは頷くと、前と同じ場所へと向かう。前の魔法陣のままでいけるようだ。

しかし今回呼び出す精霊はどの属性なのだろうか。そういや聞いてない。そう思って聞こうにもすでに呼び出された後だった。

「また少女・・・」

魔法陣の上に立っていたのはまたもや少女。歳のほどはウィンと同じくらいだろう。眼は紅色。ウィンの垂れ目とは逆でやや釣り上が

った目元はどこか強気な印象を感じられる。髪は目と同じ紅い灼熱をほうふつさせるような真っ赤な髪をショートヘアーにしている。服は俺のいつも着てるジャージを真っ赤にしたものを着ていた。どこぞの中学生か。と思ってしまう。

「ん？ああ精霊王か。久しぶりだな」
ポケットに手を突っこんだまま少女はリンに言葉を掛ける。

「ああ。汝も元気だったか？」

「まぁ私らに元気もクソもないだろうけどな」

「違いない」
そう言い合って二人して笑みを浮かべる。あの少女、格上とかそんなん考えない奴のようだ。俺と気が合うかもしれない。

「イフリート、少しぐらい敬語を使ったらどうですか？」
真面目な性格をしているウィンはそんな少女・・・イフリートって言ってたな。まぁ彼女にため息をつきながらそういう。あきらめ気味な感じが出ているのはこれまで何度も言ってきて駄目だったからであろう。がんばれ・・・。

「そんなん私に似合うわけないじゃん。考えてもみろ？私が敬語を使う姿をさ」
イフリートがそういうとリンとウィンは顎に手を当て、考えだした。ついでだから俺も考える。目の前の少女が目上の人物に対して敬語を使う姿・・・

「「「ぶっ！！」」」

全員5秒としないうちにふいた。いや・・・これは・・・

「いや・・・別に馬鹿にしておるわけではないぞ・・・くくっ」

「ええそうですよ。決してそんなことはありません・・・ふふっ」

せめて最後の笑いはなくそう二人とも。イフリートが顔を真っ赤にしている。羞恥からか怒りからか・・・両方だろうな。

「ええい！てめーら笑うんじゃねえ！ていうかその人間だれだ！なんでここにいるんだよ！」

おおう！イフリートは怒りからか髪が逆立って火の粉が周りを舞っている。もうチョイ怒ったら火の玉とかが飛んでくるのかもしれん。

そう思ってリンに話を進めるよう目くばせする。

リンは俺の視線に頷いた後、イフリートを落ち着かせ話を始めた。

「なるほどな・・・」

リンとウィンの説明を聞いてそうつぶやくイフリート。ちなみに、全員地べたに座り込み、ウィンは女の子座り、俺、リン、イフリートは胡坐をかいている。ウィンと同じ性別だろうにこいつらはどうしてそんなに胡坐の格好のほうが似合うのだろうか。

「まさかこんな人間がいるとはなぁ・・・。世界は広いもんだ」

うんうん。と腕を組んでイフリートは頷く。ちなみにこいつも初めのウィンと同じ表情を浮かべている。

「で、大丈夫なのか？」

問題はここ。ウィンの時は特に問題なくスムーズに事が運んだが今回もそんな風に行くとは限らない。
イフリートは俺の言葉を聞いて少々考えた後、

「そーだな。別にいいぞ」

「そうか？なら「ただし！！」なんだ？」

「私と戦え」

第１５話：火の精霊イフリート　前（後書き）

今回前後編に分ける気はさらさらなかったけど３０００字超えるのが目に見えていたのでここまで。次回も１週間くらいで更新します。

第１６話：火の精霊イフリート　後

・何もない空間に向き合うショーゴとイフリート。互いに獲物は持たず自然体で立っている。リンたちは邪魔にならないよう別空間からここをみている。

「行くぞ？」

「おう。負けねーぞ」
ショーゴの言葉に犬歯をむき出しにしてイフリートはこたえる。イフリートの言葉を聞くと同時にショーゴの周りに弾（バレット）が生み出され、イフリートに向かって放たれた。

「こんなんが通じるとでも？」
イフリートが手を横に一閃。ショーゴの放った弾（バレット）は生み出された炎によって跡形もなく消し去られる。

「こんなもんか？」
イフリートは相手を馬鹿にするような笑みを顔に浮かべる。

「≪集まれ≫」
イフリートの挑発をスルーし一言。その言葉とともにショーゴのの手の中に風が集まりだす。それと同時にショーゴはイフリートに向かって走り出す。距離にして数メートル。子供の体であるショーゴにとって中途半端に詰めづらい距離だ。

「≪斬り裂け！≫」
ある程度距離を縮めたところでショーゴは腕をふるう。それと同時に放たれる風の刃。初級呪文である≪刃（スラッシュ）≫『である。射程範囲は弾（バレット）

に比べると短いものになるが、その分障害物などがあっても使い方によってそれらを切り裂きながら相手へと使うことが可能な魔法である。

「っは！こんなのっ！」
それすらもイフリートは手を横に一閃して燃やし尽くす。まぁそんなのも予想の範囲内。本命は・・・

「≪アイオロス≫！」
イフリートが刃を消しさるほんの少しの間に以前父親に対して使った槍を生み出す。

「おもしれぇ。なら私もだな」
そう言って手を前に突き出すと、イフリートの手に炎が生まれる。その中から出てきたのは一本の太刀。刃渡り2メートルほどの大太刀だ。

「はっ！」
ショーゴは後ろに浮かぶ槍をイフリートの左右から挟撃させる。さらに駄目押しと言わんばかりに無数の弾を生み出して放つ。

「足りねぇな！」
しかし、それらをもイフリートは消し飛ばす。単純に一回転切りをしただけ。

その光景を見てもショーゴは怯えず突き進み、

「せいやっ！」
槍を振るう。風による補助も付き子供の体からは考えられないほどのスピードと重さのある一撃。

その一撃もイフリートはガードする。つばぜり合いになることはなく、威力を殺すようにイフリートが飛んでまた距離は離れた。

「≪荒れ狂う風！逆巻け！回れ！≫」

離れている間に手を上に向け風を集める。彼の手の上には暴風が集まり、眼を焼くような閃光が起こる。

イフリートは突然のことに眼をつぶり、守ろうとするもののその程度で防げるようなものではなく、目の前は真っ白に染まる。

「くっ！」

あれはなんだ！イフリートは眼をつむりながら思う。彼には風属性しかないはず。あのような雷や光属性のようなことができるはずもない。なのに何故……？

これにはこの世界ではない知識が必要になるので仕方のないことだ。空気というのは圧縮されることで熱を持つ。それによって白光が起きた。一時的にそれほどの現象が起こるほどにまで圧縮させ、簡易的な閃光弾にしたのだ。

その目論見は成功し、イフリートの視覚は封じた。そして、ショーゴの手の中にはいまだ吹き荒れる風の塊が。

それをショーゴは操り、

「≪嵐（ストーム）！≫」

イフリートに向かって放った。

「いや～まさかあんなに強いとはな！」

風の魔法の中でも上位に位置するはずの嵐（ストーム）を受けたはずなのにピンピンしているイフリート。彼女は自らに勝ったショーゴの肩をたたきながら大声を出して笑っている。

「それで、どうなんだ？」
ある程度満足したであろうところを見計らってショーゴはイフリートに声をかける。元の目的はイフリートとの契約だ。それを忘れてもらっては困る。

「おう！大満足だ！むしろお前にならこの身を任せてもいいな！」
元々強い者が好きなイフリート。自らに勝てる人間など今まで存在することはなく、その初めての存在となったショーゴはさらに精霊王の契約者。シルフだったウィンも信頼しているので自分の身を預けることにまったく異存はなく、むしろ望んでやってほしい気分なのである。

「いいのか？」
イフリートともウィンと同じように契約できることは素直にうれしいが、ウィンとて3カ月ほど一緒に過ごし、ようやく信頼を得てしたもの。それをまだ一日も立っていないほどの時間しか一緒にいないイフリートにしてもいいのか。そのような不安がショーゴの中には存在していた。

しかし、その不安を消し飛ばすほどのイフリートは浮かべる。

「戦っている間に感じたさ。お前のこととかな。それにリンとウィンの二人もお前を信頼している。だから私は大丈夫だと思ったんだよ」
先ほどまで浮かべていた笑顔とは違い、綺麗な笑みを浮かべるイフリート。その表情と言葉の中にあったイフリートの気持ちをショー

ゴは感じ、

「わかった。こちらこそよろしく頼む」
自身にできる最高の笑みを浮かべイフリートの言葉に頷いた。

「炎の精霊イフリート。汝は我、ショーゴを契約者として認めるか？」

「ああ」

「では、新たな名を授けよう。汝が名はヒータ」
イフリートに新たな名・・・ヒータを名付けた時、ウィンの時とは違い自分の中にポウとなる暖かさをショーゴは感じた。

「おっし。これからは【ヒータ】だな。私の身はお前に捧げよう」
ヒータがそういうと、彼女は炎に包まれる。そして、その炎が晴れると黒の胸当てに同じく黒のミニスカート、ウィンと同じような外套を身につけていた。

「どうだ？似合うだろ？」
くるっと一回転するヒータの姿は確かに可愛い。

「ああ。可愛いよ」
のでショーゴは素直に感想をヒータに述べた。突如、ヒータは顔を真っ赤にした。どうしたのかと聞いてみると、

「い、いや・・・可愛いなんて言われたことがなくてな」
まだ赤みが抜けていない頬を指で掻きながらぼそぼそっと呟くように言う。ショーゴはそれを聞いて笑みを深めた。

「無事済んだようじゃな」
何もない空間に割れ目が生じてその中からリンとウィンが出てくる。
「お疲れ様です、ショーゴ」
「私にはないのかよ」
「あなたが言いだしたことでしょうに。ならば、それを受けたショーゴを労うのは当たり前でしょうけどあなたには必要のないことです」
「いや・・・まぁ・・うん」
イフリートはウィンにぼろくそに言われ意気消沈。いつもの快活そうな雰囲気からは真逆のオーラを放ちそうな勢いである。
「大丈夫か？ヒータ。ウィンもそんな苛めてやんなよ」
「苛めたわけではないのですが・・・すみません。今後は気をつけますね」
ウィンの返答にショーゴは苦笑いしながらヒータの頭をなでてやる。
「ん・・・」
それにヒータは気持ちよさそうな声を上げ、安心しきった幼子のような笑みを浮かべる。
その反応にショーゴは親が子をみるような表情になりながら、この空間から出るまで撫で続けていた。
・

第１６話：火の精霊イフリート　後（後書き）

いや、危なかった……。文章にするって難しいね！
さて、今回は一人称から三人称と一人称がごっちゃになった感じに変えてみました。どうですかね？変でなかったらこの形式で続けようと思います。

壊れた魔導人形（前書き）

実に5カ月ぶり・・・すみませんでした

壊れた魔導人形

・特に用事も予定もない本日。普段なら家でいろいろ研鑽を積んだりするのだが、今日は気分を変えて散歩をしながら面白いものを探すことに。

日が違うからか、何かあるからなのか、前に歩き回った時よりも活気がいい気がする。

とりあえず、屋台で焼いた肉を串に刺したものにかぶりつきながらぶらぶらと当てもなく歩く。

目に入る人には屈強そうな体をもったもの、魔術師、魔法使い然としたローブや杖をもっているものなど、なんとなく冒険者っぽい人たちがよく目に入る。

前回はちらほらいる程度で、ここまでどこでも目に入るほどにいたわけではない。

まぁそんなことは知ったことではない。そう判断を下して歩き続ける。

そんなとき、隣を歩くようにしていたリンが、

『ショーゴ』

「なに？」

『あちらのほうから何やら懐かしい者を感じる』

『あー……。言われてみれば』

『しかし……なんでしたっけ？』

リンの言葉にウィン、ヒータが続く。彼女らが向いているほうは……

「また裏通りかよ……」

・あまり良い思いもしてない裏通り。しかし、彼女らが行きたいというなら仕方ない。

ぶっちゃけお前らだけで行ってこいと言いたかったが、後でフルぼっこにされることが目に見えているので素直に従う。

彼女らの指示に従って進んでいくと、鈍い青の光を放つ扉の前に到着した。どうやら目的地はここらしい。どう見ても怪しい扉である。

「というか中から凄い魔力を感じるんだが」

総量にして下級から中級程度の精霊と同等とみた。そんなものを感じる家屋に入りたいと思う奴はいるだろうか、いやいない。

というわけでまわれ右して戻ろうと思ったのだが……後ろを見た瞬間すぐにその考えを放棄した。誰だって目が笑ってない女の人達が勢ぞろいしていたらそう思うだろう。

（ええい……ままよ！）

やけっぱちになりながら目の前の扉をあける。中には――――――

――――――――想像以上にカオスな状況が広がっていた。
壊れている人形。よくわからないお香。埴輪みたいな置物。薄汚れた箒。カビの生えた食器。刃こぼれしまくった剣……。
そのどれもが大小で差はあるものの全て魔力を帯びていた。正直言ってこれはやばい。この世界には魔力を帯びた道具というものは希少価値がある。しかし、その多くは曰くつきのものになることが多い。少々の魔力を帯びるのはいい。だが、度を過ぎるとその魔力によってさまざまな事象が発生する。体調を崩してしまったりするのが最たるものだ。最もひどいのは、それらのアイテムが偶然規則性をもった配置を取られ、国一つが吹き飛んだというもの。以前書物で読んだ時は半信半疑だったが、大昔から存在していた精霊であるリンがそのことを肯定。その話を聞いた後、過ちを繰り返さないためアイテムによる魔法陣の作り方を一応教わった。
見る限り特に異常は見られないが、一つ間違えばこの街が吹き飛んでもお釣りがくるほどの魔力。さっさと退散したいと思うのは当然だろう。
『大丈夫じゃショーゴ』
そんな俺の思いを読み取ったのか、リンはそう言った。
『この場所はあの都……いや、あの世界から位相がずれておる。たとえここが吹き飛ぶことがあろうとも影響はない』
そう言われて感じ取って見れば、なんとなくリンの世界に似た感じが見受けられる。まぁだからといってここにいたらいつ巻き込まれるかという恐怖感が消えるわけないんだが。

そんなことを思っていると、奥のほうから背の低い老人が現れた。この店の人だろう。

「おや……いえ、なるほど……」

俺のほうを見てなにやら呟く。何といったのかは聞き取れなかったが。

「いらっしゃいませお客様。本日のご用件は？」

恭しく礼をする老人。しかし、そんなこと聞かれても俺には分からない。みんなの言うことに従ってここまで来たのだから。

というわけで本人らに聞いてみる。帰ってきた答えは奥のほうにかろうじで見える壊れている人形。

「それをお求めでしたか」

後ろからついてきていた老人がそう言う。

「これは何なんだ？」

「昔、精霊と亜人が協力して作った人形だそうです。ほとんど人間と同じに見えるほどの出来だったとか。ただ、人間と違うのはその単体での能力。精霊たちによって与えられた膨大な魔力を使い、一体で国を落としたとか。その後、寿命がきたのか朽ち果てこのような状態になったのだと言われております」

なるほど。懐かしいとか言っていたのはこれを作ったからなのか。

「これはいくらくらいだ？」

「いえ、お客様にはただでお譲りいたしましょう」

「……なぜか理由は聞いていいか？」

「これは今のわたくしたちでは再現が不可能な遺物であり宝の持ち腐れ。しかし、お客様にはどうやら不思議なお連れ様がいるようで」まさかこいつリンたちのことがわかるのか？いや、わかるだけで見えてるわけではないか。

「わかった。なら遠慮なくいただいていく」

「えぇ」

壊れた人形をもち俺は店を出る。出る寸前、老人の声が聞こえた。

「それではまたのおこしをお待ちしております」

壊れた魔導人形（後書き）

というわけでお久しぶりです皆様。この小説がすでに放棄されたと思われた方々、まことにすみませんでした。とりあえず放り投げるようなことはしないように致します。

サバイバル演習

・見渡す限り木、木、木……。地面は人の手が入ったような形跡もなくけもの道すらない。空を見上げれば大きな鳥達が奇声を上げながら飛びまわっている。

「どうしてこうなったんだっけ……？」

始まりはこの父の一言。

「そろそろお前にも試験が必要だな」

朝飯を食ってるときに突如父さんはそう言った。試験……これが意図するところは俺がどれだけ単独で動けるか、ということだろう。

日々、父さんや母さんのスパルタ特訓により一般的な冒険者と同等、もしくはそれ以上の知識と技能を身につけ、二人の監修の元でギルドのクエストを受けていたりもした。

しかも、両親がいたということは俺は魔術と風の魔法のみを使ってそれらをこなしていたということで。制限をかけられた中での全力しか出していないということを意味する。

ゆえに生半可な状況下でなら余裕で生き残れるというわけで。

どんな試験を出すのか余裕の気持ちで次の言葉を待っていると……

「ほんじゃま、一度眠れや」

「かはっ……！」

いきなり腹に重い一撃を受けて気を失って……

・「今に至ると」

まったく父さんの突拍子のない行動には驚かされてばかりだ。というかあの人考えないに行動しすぎだろ。

そんなことを思っていると、目の前に何か書かれた紙があることに気付く。手にとって内容を見てみる。

今日から一カ月、お前は今いる森の中で暮らしてもらう。とりあえず死ぬようなことはない……と思うが、まぁ頑張れ。じゃあ一ヶ月後に逢おう。父さんより

追記。特別な魔具を使って今のお前魔法使えないようにしてるから

『それで？どうするんじゃ？』
軽く現実逃避が入った俺を現実に戻す声をリンが上げる。

「……そだな。とりあえずこれから住む場所と水源の確保、食料の調達だな。ヒータは食料になりそうな動物、植物の探索。ウィンは住む場所の探索。リンは俺と一緒にこの森の探索だな。奇襲を受けないように気をつけてくれ」

『『『了解』』』
そう言ってヒータとウィンは何処かへと飛んでいく。とりあえずこちらは得物……スリングショットあたりを作成するとしよう。

「じゃあ行こうか。リン」

『うむ』

・とりあえず歩き回りながら見事得物をゲット。籠手にスリングっショットをつけたものと弾代わりになる石や木の実、尖った石を削って作ったはぎ取り用のナイフ、後はロープ代わりの伸縮性に富んだ木の蔦とそれの両端に石を巻きつけて作ったボーラと呼ばれる投擲武器などなどの品である。近距離で使える武器がないのは魔法が使えない人の体で野生の動物など倒せるわけがないことからである。

出来ても大型犬、もしくはそれよりもう一回り大きい生物が限界である。まだ俺は人間やめてないもの。

『まぁそれも時間の問題だと思うがな』

「不吉なこと言うなよリン」

ただでさえ魔法関連では異端異常の文字が飛び出るほどのものなのだからせめて肉体的には人間でいたいと思うのが普通でしょうに。

ちなみに、父さんが本気を出すと下級のドラゴン相手に生身で立ちまわれるらしい。

下級といえどもドラゴン、普通の冒険者であれば1パーティー5人編成が複数合わさってようやく互角といえる程度には力を有している。つまり、人外判定を受けているというわけだ。まぁそれくらい力がないとAランクなどにはなれないのだろう。

そんなことをだべりつつ歩き回っているとかすかに血のにおいを感じた。警戒しながらにおいのもとへ向かうと、一匹の狼が血だらけになって倒れていた。周りには特に気配は感じられないので狼へ駆け寄り、容体をみる。

どうやら今すぐには命に別状はないものの血も止まっておらず、このまま放置しておくとヤバいかもしれない。

そのとき、ちょうどウィンが帰ってきて、

「水場がありましたよ。ここらすぐのところです。ところでそのこは？」

「説明は後だ。案内してくれ！」
そう言った直後、ウィンも狼の様子が芳しくないのを感じ取ったのか何も言わずに水辺へと案内する。多少狼の身体が大きいものの、父さんの扱きのおかげで難なく運ぶことができた。
水辺に着くと葉や草などをかき集めて簡易ベッドを作成し、そこに横たえる。その後、服を脱いで破り、水に浸して血を拭き取っていく。大体拭き終えたら歩いている間に採取した薬草をすりつぶして傷に塗りこむ。それが終わったら残った服も破いて傷をふさぐように巻いていく。

あらかたの処置が終わったところでヒータが帰還。

「この川を少し下ったところの近くにほら穴があったぞ。何かが住んでる様子もなかったしな。近くで食料になりそうな小動物も住んでるからかなりいい環境だと思うぞ。ところでそいつは？」

「とりあえずそのほら穴へ案内してくれ。そこで事情は説明するから」
そう言うと、特にヒータは反論することなく俺らを案内する。どうやらすぐに聞きたいというわけではないようだ。

とりあえず、食・住に関しては確保完了。はてさてどうなることやら。

サバイバル演習（後書き）

約一カ月……もうちょい次は早めに投稿したいと思います

サバイバル演習・続

・ヒータの案内によってたどり着いたほら穴はなかなかに快適だった。

とりあえず寝床確保や明かり確保のために葉や枝を集め、火種を作るために木の板に凹みを入れたものと枝を用意。錐揉み式の簡易なものだが、ちゃんと発火できるように練習してあるので問題ない。

それらの準備が終わったら、作った寝床に狼を寝かせる。これでようやく落ち着いた。

待っていてくれた三人に礼を言った後、本題に入ることにする。

「あの狼の正体わかるか？」

「正体……とは？」

「お前らも気づいてるだろ？あの魔力と気。動物ならあんなに持っているのはおかしいし、魔物ならあんなに綺麗な流れじゃない。明らかに扱いなれている感じだ」

これが、あの狼を食料にせず助けた理由の一つ。一応ほぼ正解であろう答えも持ってはいるが間違っている可能性もあったので三人に聞く。

「単刀直入に言うが、魔獣だろ。あの狼」

魔獣。簡単に言うならば知性をもった獣。動物が何らかの原因で突

然変異したり、魔物が長く生きることによってなる者たちの総称。
その個体数は少ないが、わかっていることはいくつかある。

一つが魔物と違い、人間や神族、魔族、獣人と同じように魔法や気を扱えること。一部魔物でも魔力をブレスとして利用する者たちもいるが、それは精霊の力ではなくその魔物特有の臓器によってなされているものなので結果的に魔法とは言えない。
だが、魔獣はそれらとは違い精霊に力を貸してもらい魔法を使える。
そこが魔物と違う点。

それと、魔獣同士の純血種ならば幼くても知性をもって行動できるそうだ。その目撃例はごく少数のようだけれども。

それで、魔獣の大きな特徴として基本的に成体として存在している。
まぁそれも当然で、人間などでは考えられない年月を重ねて初めてなるのだから当然。

しかし、今回助けた狼はどう見ても幼体。最低でも2メートル以上の体格をもつものを成体とするがこの狼は俺と同じほどの大きさ。
故に多少自信が持てなかった。

『そうだな。そやつは魔獣じゃな。それも我らと縁のある』
だが、リンは肯定した。しかもどうやら何らかの関係があるらしい。

「縁ってなんだ？」

「はるか昔のことだが、そやつの先祖が我と会話したことがある。
そんな存在はほぼおらなんだので覚えて居るぞ」
ちなみに人間では汝がはじめてじゃがな。そう付け加えたリン。ど

うやらチートな存在を先祖に持つ狼らしい。
なら、力だけなら申し分がない。
『しかし、ショーゴは何故助けたのです？別に魔獣であろうとも助ける意味はないでしょう』
ウィンの言い分はもっともである。だが、俺にとっては魔獣であるならば助ける価値があった。
その理由は、
「こいつを俺の使い魔にしようと思う」

・使い魔。魔術師、魔法使いの作る相棒のようなものだ。メジャーなものをあげれば、フクロウやネコ、ヘビなどが代表例となる。
基本的に使い魔とは偵察目的などで重宝される。まぁ中には愛玩動物としての目的で作る者たちもいるが。
しかし、戦闘用として作るならば魔物や魔獣を使ったほうが早い。
そう考える者たちも今までにはいた。
そして、実行したがそれらはことごとく失敗した。理由として、魔獣のほうは根本的なスペックが違いすぎて従わせることができない。魔物のほうはまだ推測しかないが、理性がほとんどなく、基本的に本能のみで生きているため従う従わないの概念が存在しないからだという。

だが、今回の場合はもしかしたら成功するかもしれない。
成体でない魔獣。これは力がまだ未熟であることを示す。そして、俺は魔法使いとしてのスペックだけを見れば人外レベル。だからこそ試してみる価値はあると思った。

それに、これは俺や精霊たちでの推測だが、ただの動物を使い魔にしようとしたら俺の魔力に耐えられない可能性が大きいのだ。
しかし、魔物のほうは使い魔にすることが今のところ不可能。だが魔獣のほうならどうか。スペックが問題なだけなら俺でもできるんじゃないか？そう今まで考えていた。

そして、今回その機会がやってきた。だからこそ助けたのだ。
まぁあちらさんが拒否するなら無理強いはしないが。無理やり使い魔にするのは俺の性格的に御断りである。

それらのことをみんなに説明し、納得してもらったところで背後に動く気配を感じた。目を向けると、無理やり体を起こそうとしながらこちらを睨む狼の姿が。

「あんまし無理に動くと傷が開くぞ」

「グゥゥ……」
敵意丸出しな狼。こりゃ無理かも。そんなことを思いながらも狼の目をしっかり見て話す。

「俺の存在の何が気に食わないのかは知らんが、お前の体がヤバい

のは事実だ。治るまでおとなしくしとけ」

「……」

本心からそう言って狼を諭す。どうやら、多少は落ち着いて自分の状態もわかったのか傷に触らないようゆっくりと寝そべる。まぁこちらを依然と睨んだままだが。

とりあえずの問題も解消したところで今日の晩飯探しに出かけることにしよう。装備の確認をした後、リンに頼んでここにいてもらう。見えてはいないだろうが、存在としてだけは知覚できているらしい、とリンが言っていたのでそうしてもらった。

あれだけの存在が前にいたら抜けようとはしないだろう。というか今の状態じゃ歩くのもままならない状態だろうけれども。

ま、今はそれらのことを置いておき晩飯確保と行こう。気持ちを切り替え、俺はヒータが見つけた小動物のいるところへ向かった。

・サバイバル3日目

「ほら食え」

切り分けたウサギのような小動物の生肉を狼の前に放る。その隣に水の入った木でつくった容器も忘れずに置く。昨日は渡しても渡しても木の器は台無しにするわ、肉は大切にしないわで大変だった。

まぁその後“おはなし”をしたらわかってくれたようだが。

今日はちゃんと粗末にせずに食べてくれているようで安心した。

サバイバル5日目

息を殺し、得物に手をかける。狙うは無防備な姿をさらしているウサギ。片側の石をもってブンブンと振り回し……投げる。

それの行く先を見送りながらも、後ろ手にスリングショットの弾をとり、放つ。その数は三。ボーラのほうは後ろ脚にケガを負わせるだけに終わったが、その逃げた先に先ほど放ったスリングショットの弾が。それぞれ、目、前足、わき腹に命中。貫通とまではいかなくても、勢いよくめり込み絶命させている。

死んでいるのを確認したら、木の枝に足をくくりつけて運ぶ。ボーラも回収し、一度ほら穴へ帰る。

道中、絶妙な場所にいた2メートルほどの怪鳥の頭をボーラでぶち抜いて追加の食料とした。

サバイバル8日目

「暴れるなよ？」

狼にそう言い聞かせ包帯代わりの服をとる。それらを一度川で洗浄し、ほら穴前の木に引っかけて干す。

その間に薬草をすりつぶして混ぜ合わせ、傷薬を調合し、狼の患部に塗りこむ。痛みで多少身じろぎはするものの、大きな抵抗はしない。というか、抵抗するのが無駄だとわかるくらいに“おはなし”したおかげである。

治療が終われば狩りにいって食料を調達し、帰る頃には包帯代わりの服も乾いているので巻きなおし、飯を食って話しかける。

まぁ相手にされなかったけれど。

サバイバル１８日目

その日の夜。この生活の中で初めて俺よりも早く狼が寝ていた。いつもは俺を警戒して寝ていなかったというのに。

まぁ信頼されたんじゃなくて、ケガしてるのに連日遅くまで起きていたからだろう。ここにきてその無理がたたったようだ。

それにしても寝てる姿は無防備そのもので可愛げがある。ずっとこっちを警戒してる感じだったのでなんか新鮮だ。

眠くなるまでその寝顔を鑑賞しようと思い見つめていると、

「わたしを……見捨てないで……」

急に少女の声でそんな言葉が聞こえた。

リンの顔を見る。彼女は首を横にふった。

ウィンの顔を見る。彼女も同じく首を横に振った。

ヒータの顔を見る。彼女も同じく以下略。

反射的に彼女らの顔を見たが、いつも聞いてる彼女らの声とは全く違った。
というわけで一番最後の可能性。狼のほうを見る。彼女（声的に）の目には光るものが。状況的に見て狼の声で間違いないようである。しかし、私を見捨てないでとはどういうことだろうか。色々疑問がわきあがるが、考えたところでどうしようもない。

なんとなく、頭をゆっくりといたわるように撫でてみる。すると、不安に満ちた雰囲気から、どこか安心したような雰囲気に変わる。

それを感じ取り、眠くなるまでそうしておくことにした。少しでもこの狼の不安が取れればいいと思う。

サバイバル２３日目

あと１週間でこのサバイバル生活も終わる。特に強い魔物の気配も今のところは感じていないのでこのまま何事もなく終わってほしいものであるが、一つ気になることがある。

それはあの狼がつけられていた傷。いくら幼体で未熟といえども魔獣であることに変わりはない。それなのにあの満身創痍な状態になっているということはそれだけのことがあったということ。
それに、魔獣は基本的に一族全員が群れて行動するもの。しかし、あの狼を助けに来る様子もない。これもおかしい。

１番手っ取り早いのは、あの狼が全てを話してくれることだが、あ

いにくそこまでの信頼は得ていない。
故に今の俺に出来るのは最後まで気を抜かずに警戒し続けることぐらいだ。

サバイバル２９日目

最終日前の今日、ついに狼の傷が治った。包帯を取ってやると傷の具合もばっちり良くなっていた。
一応何処か違和感などを感じるところがあるか聞くと首を横に振った。

この一カ月弱、一緒に暮らしてある程度の信頼を勝ち取ったが、やはり使い魔になってもらうほどではない。だから俺は何も言わずに狼を送りだした。

その姿が森の中へ消えたのを確認し、俺も狩り場へと向かう。最終日まで気は抜かない。

・狩り場へ向かい、罠などを仕掛けていると急にそれなりの強さの魔物の気配を感じた。どうやら隠れていたらしいが……何故今になって現れた？

それに何やら嫌な予感がする。それを感じるといてもたってもいられなくなり、もしかしたら自分にも被害があるかも知れないと思ったのもあって、気取られないように気配を消し、魔物のほうへと向かう。

ある程度近くによると、大きな咆哮が聞こえた。それに伴い地響きも生じる。どうやら、なかなかにヤバそうな魔物である。木の上に上ると、その正体はすぐに分かった。

「よりにもよってワイバーンか……」

ワイバーンとはドラゴンの類の中では最下級に位置する魔物である。しかし、最下級とはいえドラゴンに変わりはなく、単独での撃破は出来ないわけでもないが、少なくとも魔法も使えないガキの俺には相手出来るはずもない相手である。

そして、その相手をしているのは今朝別れた狼。今のところ大きなケガは負っていないようだが、大分劣勢な様子。

『どうするんじゃ？ショーゴ』

リンにそう聞かれるが、常識的に考えればここで手を出すのは下策。そもそも、今の俺に出来る手立てなどほとんどない。こんな急ごしらえの手作り狩猟道具でどうにかできるほどワイバーンは弱くない。

『なら助けないのですか？』

そーだな……どう考えても俺には重荷過ぎるもの。

『ならその手の中で飛び出しそうなそれはなんだ？』

これか？これはだな……ちょっと大きな得物を狙うためだ！

そう答えて思いっきりぶん投げる。それと同時にダッシュ。あたり

の地形は大体把握した。逃走ルートも想定済み。ならばあとは成功させるだけだ。

飛んで行ったボーラは運よく硬い鱗で覆われていない目に命中。気をひきつける以上の仕事をしてくれた。突然の痛みにうずくまるような形のワイバーン。そのすきに狼をかっさらう。徐々に魔力の封印が解けだしているのか、魔力による単純な機動力強化のみは可能になっているのも嬉しい誤算。予想よりも早く、ポイントへたどり着く。

それと同時に咆哮。どうやら奴(やっこ)さんはキレた様子だ。これから破壊活動を行いながら俺達を探すことだろう。

だから、探す材料となる匂い。それを消し去ることにする。

その方法は、川。狼を抱えたまんま下流目指して流されていく。このまま流されていけばこのサバイバル生活の拠点であるほら穴へと帰ることができる。今日一日くらいは見つからないことだろう。

「なんで助けた……」

聞いたことのある少女の声。前に一度聞いたことのある狼の声だった。

「色々と考えて思った結果の行動だな」

おそらく狼があんなにケガをしていたのは十中八九あのワイバーンのせいだろう。今までこの辺にいる気配を感じなかったのは、痛み分けのようになり強靭な気配が出せなかったせいか、狼が何かやって今になって見つかったとかそんな感じだろう。

それに仮にも一カ月を共にした相手をそう簡単に見捨てられるような性格はしてないつもりだ。

あとは、あの寝言のわけも聞いてみたい。

「まぁでも一番は助けたいって思ったからだろうな」

これだけのことをつらつらと述べてみたが、どれも後付けのような気がする。あの場で感じたのは多分これ。

そして、気が付いたらあんな行動を起こしていた。

それにしても、今だからこそ冷静に考えられるが相当危ない橋を渡っていた気がする。

一カ月がそろそろ過ぎようとしているからか封印が若干緩んだが、それがなければワイバーンから逃げられたかどうか怪しい。

ま、それも過ぎたことか。とその考えを放棄し、狼の傷の手当てをしながら現状を確認する。

「リン、どこまで封印解けてる？」

『せいぜい下級魔法を扱う程度じゃな』

「そうか」

もうちょっと魔力が使えれば完全に解呪出来たかもしれないのだが。

ちなみに、リンたち精霊は今の状態では基本自力で魔法を行使することはできない。俺という人間に縛られているからだという。

俺がもう何柱かの精霊と契約すれば魂が精霊側に引っ張られて、俺のからだを通して外（オド）の魔力を取り込み魔法を行使できるようになるらしい。

とりあえず、現状では封印を解く手立てがないということだ。そして、今以上に緩む気配は感じない。たぶん多少緩むだけでも奇跡だったのだろう。

明日には解けるから心配いらない……と、楽観視することは現状を考えると不可能。明日といってもいつ解けるのかもわからず、迎えもくるのがいつなのかもわからない。

そして、明日中ワイバーンから逃げおおせれる自信はない。そう考えると、だいぶきつい気がする。

「なにも……聞かないのか？」

少しでも生存率を上げるべく策を練ろうと考えていると、ポツリと狼が呟く。

「聞かないよ。でも、今火が焚けないからそばに寄っていいか？」

無言だが、拒否するような気配は感じない。お言葉？に甘えて隣に腰掛ける。隣から伝わる温もりが少し肌寒かった体を温めてくれた。

無言のまま、二人寄り添って時が流れるのを感じながら、俺は策を練っていた。そんなとき、

「なぁ……」

狼がそう言い、話し始めた。

サバイバル演習・続（後書き）

本当はこの回で終わらせたかったけど予想以上に長くなったのでき
ることにした。次回こそ終わらせる。
ちなみにこのサバイバル演習で幼少期は終わらせます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7327l/

異世界転生でほのぼのライフ

2011年9月30日23時14分発行